一般国道170号西石切立体交差事業に伴う

鬼虎川遺跡第49次発掘調査報告

平成13年3月

東大阪市教育委員会

はしがき

わが東大阪市に聳え立つ生駒山のふもとには、数多くの貴重な文化遺産－遺跡が眠っています。その中でも弥生時代の遺跡は全国的に著名なものも多く見られます。今回報告します鬼虎川遺跡はその一つで、近畿地方の弥生中期の拠点集落として広く知られています。昨年度実施しました第49次調査は遺跡の北端部に位置し、弥生時代の集落の広がりを知る上で大きな成果を得ることができました。その詳細については本書に記すとおりです。

本市としましては、これら遺跡調査の成果をいち早く公表し、埋蔵文化財の保護・顕彰に努めるため本書を刊行いたします。

本書が埋蔵文化財保護行政の報告書としてだけでなく、地域の歴史を掘り起こす冊子として広く読まれることを祈念して、はしがきといたします。

平成13年3月

東大阪市教育委員会

例　言

1．本書は一般国道170号西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第49次発掘調査の概要報告書である。
2．調査は、大阪府八尾土木事務所の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
3．調査にかかる費用は、全額大阪府八尾土木事務所が負担・用意した。
4．現地調査は、平成11年7月30日より平成12年3月30日まで、遺物整理は平成12年4月1日から平成13年3月31日まで実施した。
　現地調査は、菅原章太・坂田典彦を担当として実施した。遺物整理は、才原金弘の指導のもとに槇原美智子を担当として実施した。
5．本書の執筆は、Ⅰ・Ⅲを菅原、Ⅱ・Ⅳを坂田、Ⅴ－1)・2)・3)を槇原が担当した。Ⅵは菅原と坂田が担当した。編集は菅原が行い、坂田と利田が補助した。
6．遺構写真は菅原・坂田が撮影し、遺物写真は㈱アステムに委託の上撮影した。
7．現地の土色及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』(1998年版)に準拠し、記号表示も同書に従った。
8．基準杭・調査杭の打設は有限会社明香コンサルタントに、出土木製品の樹種分析は㈱東都文化財保存研究所に、第22図の図面合成は（株）アコードに、各々委託の上実施した。
9．獣骨の鑑定には、安部みき子氏(大阪市立大学医学部)を煩わせ、報文Ⅴ－4）をご執筆いただいた。厚くお礼申し上げます。
10．現地調査及び本書作成にあたり、下記の方々から多大なご協力・ご教示をいただいた。
　記して謝意を表する次第である。(敬称略・順不同)
　大阪府八尾土木事務所・アーバンテック株式会社・安西工業株式会社
11．現地調査及び本書作成にかかる整理作業には、下記の方々の参加を得た。

永井佐都子	松本真由子	西本美也子	西川美奈子	大山えりか	釜田友里絵
利田恵美	常坂加奈	大久知子	宮田佳代	久詰裕子	堀口悟史
小山善弘	大畑洋恵	朝平　琴	水沼　優	大木祥太郎	西野　剛
田中　実					

本文目次

はしがき
例言
Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 5
　1）　調査方法と目的 …… 5
　2）　調査の経過 …… 6
Ⅳ　調査の概要 …… 7
　1）　層序 …… 7
　2）　遺構 …… 13
Ⅴ　出土遺物 …… 22
　1）　土器 …… 22
　2）　石製品 …… 27
　3）　木製品 …… 31
　4）　動物遺体（安部みき子） …… 32
Ⅵ　まとめ …… 33
付．鬼虎川遺跡第49次調査出土木製品の樹種分析（東部文化財保存研究所） …… 35

挿図目次

第１図　調査掘削最終面の状況 …… 1
第２図　調査区位置図 …… 3
第３図　鬼虎川遺跡周辺位置図 …… 4
第４図　大地区の区分 …… 5
第５図　調査地地区割図 …… 5
第６図　Ａ・Ｂ地区東壁断面図 …… 9～10
第７図　Ｃ地区東壁断面図 ……11～12
第８図　溝１実測図 ……13
第９図　溝２実測図 ……14
第10図　第９層下面足跡実測図 ……15
第11図　溝３実測図 ……16
第12図　溝４・土坑１実測図 ……17
第13図　自然流路１実測図 ……19～20
第14図　第11層弥生土器出土状況実測図 ……21
第15図　第11層出土土器実測図 ……22
第16図　第11層出土土器実測図 ……24
第17図　各遺構出土土器実測図 ……26
第18図　石製品実測図 ……27
第19図　木製品実測図 ……28
第20図　木製品実測図 ……29
第21図　木製品実測図 ……30
第22図　鬼虎川遺跡第49次調査周辺の弥生時代遺構分布平面図 ……34

表目次

第１表　石器観察表 ……31
第２表　鬼虎川遺跡出土の動物遺体一覧表 ……32
第３表　シカの上腕骨の計測値 ……32
第４表　イヌの軸椎（第２頸椎）の計測値 ……32

図版目次

図版1　A地区の遺構　1．溝2検出状況（北から）　2．第9層下位面足跡検出状況
図版2　C地区の遺構　1．溝3検出状況（北から）　2．溝3完掘状況（西から）
図版3　C地区の遺構　1．溝3遺物出土状況（西から）　2．土坑1、人頭大礫出土状況（北から）
図版4　C地区の遺構　1．溝4完掘状況（西から）　2．溝4東壁断面
図版5　C地区の遺構　1．第8層内横瓶出土状況
2．第9A層内枘穴加工木製品出土状況（西から）
図版6　C地区の遺構　1．自然流路1検出状況（南から）　2．自然流路1完掘状況（北から）
図版7　C地区の遺構　1．自然流路1右岸に伴うピット群（東から）
2．溝7・8、ピット完掘状況（北から）
図版8　C地区の遺構　1．自然流路1左岸と流向に沿った木製品（北西から）
2．第9A層内木製品出土状況（北から）
図版9　C地区の遺構　1．第11C層内弥生土器出土状況　2．第11C層内石庖丁出土状況
図版10　第11層出土遺物　弥生土器壷・小型把手付鉢・甕
図版11　第6・8・11層出土遺物　弥生土器甕、須恵器杯身・横瓶、土師器高杯
図版12　第11層出土遺物　1．弥生土器壷　2．弥生土器壷・鉢
図版13　第11層出土遺物　1．弥生土器甕蓋・甕　2．弥生土器壷、鉢
図版14　第1・2・4層出土遺物　1．須恵器杯身・高杯、瓦器、磁器
2．須恵器杯身・壷、土師器鍋・羽釜
図版15　第5・6層出土遺物　1．土師器小皿・高杯、羽釜・甕、須恵器杯身・高杯・甕・提瓶、黒色土器、磁器
2．須恵器杯・高杯・甕・提瓶
図版16　第6層出土遺物　1．弥生土器壷・甕、高杯
2．土師器大皿、瓦器椀、陶磁器
図版17　第7・8層出土遺物　1．須恵器杯身・甕、土師器皿・甕・鉢
2．須恵器杯蓋・杯身・高杯・甕
図版18　第8・10・13層、溝1・3出土遺物　1．弥生土器壷・甕・鉢
2．弥生土器壷・甕蓋、土師器大皿・高杯
図版19　石製品　1．打製石鏃・石錐・削器　2．磨製石庖丁・砥石
図版20　木製品　曲物・板材・加工木・杭
図版21　木製品　加工木・板材・杭
図版22　木製品　加工木・板材・鍬・木錘・曲物・櫂
図版23　自然遺物　動物遺体
図版24　顕微鏡写真
図版25　顕微鏡写真
図版26　顕微鏡写真
図版27　顕微鏡写真

Ⅰ　はじめに

本書は、一般国道170号西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第49次発掘調査の概要報告書である。標記の事業(「アンダーパス事業」と通称している)関連の発掘調査は既に平成10年度に鬼虎川遺跡第44次発掘調査を実施し、その調査成果については平成12年3月に報告書(東大阪市教育委員会『一般国道170号西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第44次発掘調査報告』)を上梓した。詳細は同書に譲るが、成果概要をここで箇条書きに紹介しておく。

① 弥生Ⅲ～Ⅳ期の溝7と溝8を検出した。溝から多量の土器や石器、木製品が出土した。

② 上記の溝は弥生時代中期の遺物包含層をベース面として切り込んでいる。堆積層では上位面で細礫～粗粒砂のオーバーフロウが厚く認められることから鬼虎川の弥生中期集落の廃絶・解体・抛棄などに拘わる遺構(自然流路)の可能性が考えられた。

③ 弥生時代中期の遺物包含層は調査地の北端から南端まで切れ目なく多量の遺物を包含し、その中から、ヒスイ製大型の畝形勾玉が出土した。勾玉は鑑定の結果、新潟県糸魚川産のヒスイであることが判明しており、当時の交易を考える資料であるのと同時に勾玉を保持しえた鬼虎川集落の在地首長の優位性が窺える。

④ また畝形勾玉が調査地の南端から出土したことで、中期の集落居住域の中心部がすぐ南側に広がることも推測され、従前の調査成果が追認されることにもなった。

いっぽう前記の大きな成果と対照的に、調査工事設計時の鋼矢板の長さに制約があり、遺物包含層の掘削とその下面の精査を実施することが危険と判断されたため、T.P.約－0.2m以下の調査を断念せざるを得なくなった。このことは今後アンダーパス事業関連の発掘調査を実施する場合の教訓となった。

今回報告する第49次発掘調査はアンダーパス事業関連調査の２年度目にあたる。調査対象箇所については、国道308号線の北側、一般国道170号線の西側延長約90mが選定された。これは本体工事の着手に備えて、調査依頼者である大阪府八尾土木事務所の指示に因るものである。大阪府(担当大阪府八尾土木事務所)と東大阪市教育委員会(担当文化財課)は第44次調査終了後、ただちに第49次調査着手に係わる協議を開始した。その結果、現地調査を平成11年７月30日から平成12年３月30日まで行った。調査対象面積は396㎡である。また、鋼矢板は前回の教訓を踏まえ、弥生時代遺構面以下の調査が確保される長さとなった。ただし調査は後述のとおり、隣接する社屋や店舗の営業活動を保障することが前提として計画されたため、調査地の大半が覆工板で占められることになった(第1図参照)。このため、現地の遺構写真は全景カットを断念し、近景カットを多用して撮影した。遺構面の全景は図面を参照いただくことにし、この点諒とせられたい。

第１図　調査掘削最終面の状況

Ⅱ　位置と環境

鬼虎川遺跡は、東大阪市弥生町、宝町、西石切町、新町にまたがって所在する南北1100m、東西650mの大規模な遺跡である。本遺跡周辺は大阪・京都・奈良を結ぶ交通・流通の要所であり現在の外環状線と国道308号線（府道築港枚岡線・近鉄東大阪線・第２阪奈有料道路）の交わる位置（被服団地前の交差点）にあたる。今回の調査区は外環状線に沿って西側を、交差点から北に100m間を対象とし、遺跡の範囲では北辺に位置する（第２図）。よって今回の調査目的の１つである「弥生時代における生活域の北限を確認する」ことに適した調査区である。

東大阪市の地形は、標高642mの生駒山を主峰とする生駒山脈が形成する丘陵部と標高５m前後の平野部に分けられる。生駒山西麓にはその急斜面から派生するいくつもの谷川が存在し、平野部との境で複雑な扇状地を形成している。本遺跡名でもある鬼虎川（現在、新川）や、南へ下り山畑遺跡、縄手遺跡、コモ田遺跡、馬場川遺跡内を流下する鳴川、大門川、箕後川などの前身河川がそれにあたり、遺跡の立地条件に多大な制約をもたらしている。本遺跡は扇状地末端から平野部移行域に立地し低湿地遺跡として著名である。またその環境下から木製品、人骨など有機質遺物の検出例が多いことでも有名である。

本遺跡周辺に人々が住み始めるのは旧石器時代からである。旧石器時代の遺跡は正興寺山遺跡、芝坊主山遺跡が知られており、ナイフ形石器が採集されている（『原始古代の枚岡』『枚岡市史』第３巻史料編１）。明確な遺構の存在は今のところ知られていない。また鬼虎川遺跡33次調査でも海成堆積層内からナイフ形石器や翼状剥片が検出されており、周辺に該期の遺跡があったと考えられる。

縄文時代の遺跡は、市域北より善根寺遺跡（中期～後期）、日下遺跡（後期～晩期）、芝ヶ丘遺跡（後期～晩期）、神並遺跡（早期）、鬼塚遺跡（後期～晩期）、縄手遺跡（中期～晩期）、馬場川遺跡（中期末～晩期）などがある。鬼虎川遺跡は、東域で海蝕崖が確認されたことから中期頃までは河内湾の汀線付近であったと思われる。また中央西よりでは、小規模ながらも晩期～弥生時代前期初頭の貝塚が確認されている。

弥生時代になって、縄文時代から引き継ぐ遺跡を含めて平野部の遺跡数は急増する。周辺では北接する植附遺跡、南接する鬼塚遺跡、西接する水走遺跡などが前期に存在した。本遺跡も上記にやや遅れながらも前期末には営みを開始する。該期におけるムラの境界と現在の行政区画は必ずしも一致しないが、既往の調査でそれぞれ墓域・居住域が検出されていることから同時期に複数のムラが存在していたことが考えられる。中期になって本遺跡は最盛期をむかえ、東接する西ノ辻遺跡と並び河内湖および河内湖東岸の拠点集落を担った。また市域では、本遺跡から４km南西部に瓜生堂遺跡が存在し、河内湖、旧大和川（楠根川）の恵みをうけて拠点集落を形成した。数多くの方形周溝墓をはじめ木製農耕具・石製品が出土し、近年では新たに祭祀関連遺構が検出されている。これら河内湖を終着点として北流する旧大和川水系と、生駒西麓を西に流下する谷川を背景に、拠点集落が形成・発展していくのである。しかし後期になると大規模なムラは縮小し、本遺跡や植附遺跡は居住域を放棄する。代わって丘陵部に小規模ながら山畑遺跡、岩滝山遺跡などの高地性集落の存在が確認されている。これらには当時の社会体制が大きく関わっていると思われる。

古墳時代中期の集落は、植附遺跡・神並遺跡・西ノ辻遺跡が知られている。特に植附遺跡では造り付けカマドのある竪穴式住居や韓式系土器・製塩土器が出土しており、流通の媒体となる塩とそれにともなう人の動きが推測できる。

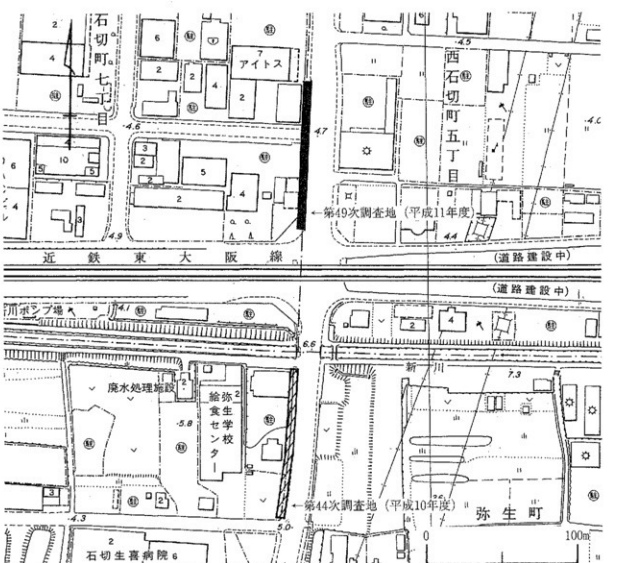
古墳では、本遺跡の北0.2kmにある中期の塚山古墳、明治時代に造幣局イギリス人技師ウィリアム

・ゴーランド氏によって調査された芝山古墳・山畑古墳群、若宮古墳群、神並古墳群、客坊山古墳群、花草山古墳群、大蔵古墳（11体の人骨出土）など、市域では後期の古墳・古墳群が多い。これらは大和政権に仕えた氏族の墳墓に比定され、今後散期の中央政権と地方氏族の関係を知るうえで貴重な遺跡である。

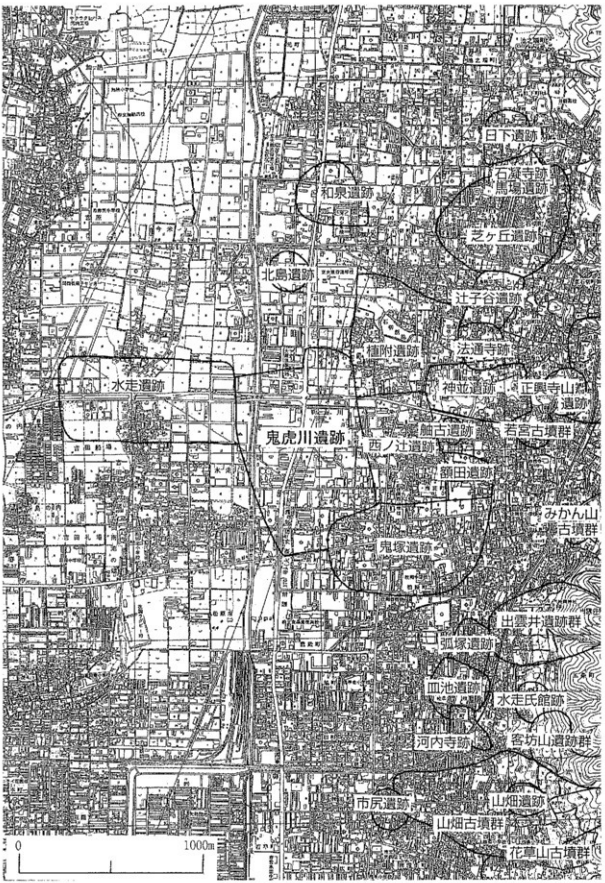
奈良時代から平安時代の集落としては神並遺跡、鬼塚遺跡が知られている。特に鬼塚遺跡では掘立柱建物跡や墨書土器が出土している。また、式内石切劍箭神社に北接する法通寺跡や客坊廃寺、河内寺跡などの氏寺、行基が建立したとされる石凝寺跡などがあり、当地域も仏教文化を受容していたことが窺える。

鎌倉時代以降、中・近世に至って本遺跡は東域で集落遺構が検出されているものの、大部分が生産域として利用され、「掘り上げ田」と呼ばれる低湿地特有の農業形態が生まれた。

このように本遺跡周辺は、生駒山の麓で自然環境に恵まれ難波・大和を結ぶ街道沿いに立地するという政治・経済的環境のもとで旧石器時代から現代に至るまで連綿と人々が活動する地域となっている。



第２図　調査区位置図



第3図　鬼虎川遺跡周辺位置図

Ⅲ　調査の方法と経過

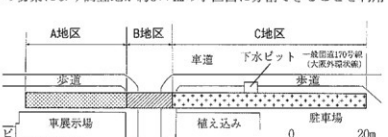
1）調査方法と目的(第4図・第5図)

今回の調査では、幅4.4m、延長90mの南北に長いトレンチが調査対象範囲として設定された。調査面積は396㎡である。このうち、北端から南側の下水ピットまで覆工板が架設された。これは、排土搬出にかかる重機や車輌の運転スペースと、調査地に隣接する社屋・店舗での車輌通行の確保のため設けられたものであった。さらに、調査地北側の現道部分には既設の下水管が通じており、現道部分が調査対象とされたことから、調査の遂行にあたっては既設管の撤去が不可避の前提となった。いきおい、このことは調査の進行を大きく規制することになった。

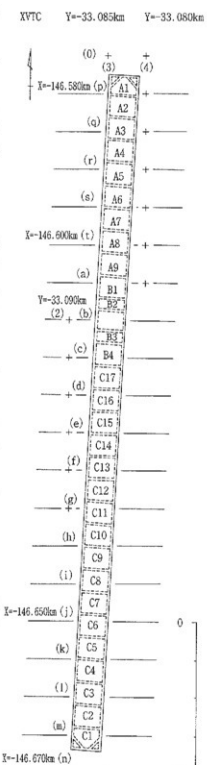
調査は、北から車展示場の東側をA地区、現道部分をB地区、その以南箇所をC地区と仮称、大別して進めた(第4図)。調査依頼者との協議で、B・C地区については既設下水管撤去に相当時間を要することが明らかとなり、調査にかかる掘削はA地区から着手することになった。B・C地区は、A地区の調査の間に鋼矢板打設を行ない、A地区調査終了後、調査に着手した。A～C地区の大別も前記の調査の段取りに従って呼称したものである。これらの詳細については次節に記したので参照いただきたい。

調査は土留め鋼矢板の打設後、現地表から1.5mまで機械で掘削を行なった。以下の土層については、調査対象の深度とされた現地表下5.4mまで人力による掘削を行なう予定であったが、調査依頼者との協議により、人力対象3.9mのうち上部2.0mは重機を併用する人力掘削、下部1.9mは人力のみによる掘削を行なうこととなった。現地表はT.P.約4.8m、併用掘削上面のレベルはT.P.約3.3m、人力掘削上面のレベルはT.P.約1.3m、同下面のレベルはT.P.約－0.6mであった。

掘削にあたっては、鋼矢板の歪みを防護し、安全作業を確保する観点から2段の支保工を行なった。南北の腹起に対し東西の切梁により調査地が約3×4mの小区画に分割できることを利用



第4図　大地区の区分



第5図　調査地地区割図

して、地区割とした。地区割の表示は、大地区A・B・Cの次に数字を付けて行なった。A・B地区は北から南へ、C地区は南から北へ順に番号を付した。これは調査の進行に合わせて便宜的に行ったものである。疑とせられたい。また平成10年度実施の第44次調査では弥生時代の遺物包含層の検出以後、切梁区画から国家座標系の地区名称に変更して、各種の実測図作成をはじめ、出土遺物の取り上げにも援用したが、今回の調査では、国家座標系のメッシュ方向に対し調査トレンチが斜位になり却って地区割が煩雑になること、および煩雑な地区割を実施するのに反しそれほどの遺物の出土量が見込めないこと、などを斟酌して、遺物の取上げは全体の調査終了まで切梁区画をそのまま使用した。なお第5図には切梁区画とともに、国家座標系の座標値を示した。第7次調査報告で提示された鬼虎川遺跡の地区割に従えば、起点を東大阪市川中付近(X=－146.3、Y＝－29.9)に求めることにより、第49次調査地は、XⅥCとXⅥDに2大別される。南北線と東西線の交叉する南東杭を地区表示の名称とする原則に拠ると、北端のA1区周辺はXⅥC4p区に、南端のC1区周辺はXⅥD3n区に該当することになる。

今回の調査に当たっては、従前行なわれた近辺の調査成果に留意しながら、以下の点を調査目的として設定した。

① 鬼虎川遺跡弥生時代中期の集落域の北限と規模の確定。今回の調査地は従前の調査成果から当該期集落の北限にあたることが推定されてきたが、南北約90mのトレンチを設定したことでより明確に集落の構造を捉えることが可能になった。

② ①と関連するが、集落の外縁での遺構・遺物包含層の広がりを確認することで、弥生期拠点集落の様相の推定。

2）調査の経過

現地調査は平成11年7月30日から翌3月30日まで実施した。鋼矢板打設や覆工板架設ほかの準備工事を経て、A地区から機械掘削を平成11年10月25日に開始した。以下、日誌抄の形で要点を述べる。

10月25日　A地区、重機使用による盛土の除去を開始する。

11月19日　2段目の支保工架設のため、A地区の掘削作業を一時中断する(再開は12月2日)。その代替としてB地区の調査を開始。B地区の調査はこれ以降A地区・C地区の工程調整の合い間に行うこととする。またこの日を前後してC地区の鋼矢板打設がはじまる。27日まで行なわれる。

11月29日　翌30日にかけてC地区の機械掘削を行なう。工程上、精査はA地区を優先する。

12月15日　A地区の調査終了。遺構の密度や遺物の包含状態など稀薄であった。翌16日からC地区の機械併用人力掘削を開始。

12月22日　C地区の砂礫層から古墳時代～中世期の土師器・須恵器が中量程度出土。

1月26日　C地区で落ち込み状の遺構が顔を覗かせる。この日より弥生時代の遺構面精査に入る。

2月2日　C地区、第10層上面精査。溝・ピット検出。溝内から杭材・建築部材など木製品多数出土。この後、北東－南西ラインに流下する溝は埋土の状況より自然流路であることが判明。この間、溝・ピットの平面図や木製品の出土地点などの記録作成に集中する。

2月15日　C5区周辺で弥生第Ⅱ様式に属する土器が多数出土。明確な掘り込みを伴わないことから土器溜まりと捉える。土器に伴出して石器も見られる。

2月18日　C5区周辺の遺物取り上げを開始する。最終面までの掘削も順次行なう。

2月21日　C1～C3区で、最終面でピットを検出する。記録作成を行なう。

3月1日　C地区のアゼ崩しを終了。

3月30日　本日を以って鬼虎川遺跡第49次調査の現地調査を終了する。

Ⅳ　調査の概要

1）層序

今回の調査では、前述のとおりトレンチ内に残土スペースを設けざるを得なかったこと、A・B地区の調査を先行するなど工程差が生じたこと、またC－8～17地区で地表下3mまで既設下水管による撹乱が存在することから、A～C地区を通じた層位は礫層である弥生相当層のみを捉えるにとどまった。よって層名は、A・B地区、C地区各々で付けている。また南北に長いトレンチのため同一層であっても情況により土色・質が変移している箇所もあり、A～Dなどの記号を付けて分層した。

【A・B地区】

第1層　旧耕土・床土構成層であり、A～Cに分層できた。3層とも植物遺体を帯状に数枚含む。

1A層　5BG5/1青灰色礫混じり粘土。1㎜大の細礫を含む。マンガン粒が斑点状に沈着。

1B層　10BG6/1青灰色粘土。

1C層　7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土。炭化物を若干含む。

第2層　第1層以前の耕土層。

2A層　10BG4/1暗青灰色砂礫混じり粘土。8㎜以下の中礫を多量に含む。炭化物・植物遺体を含む。

2B層　2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土。

第3層　10G4/1暗緑灰色礫混じり粘土。15㎜以下の中礫を少量含む。上位に植物遺体を含む。

第4層　7.5GY5/1緑灰色砂混じり粘土。上面は溝1の道構面。ブロック土を含む。

第5層　近世期の遺物の包含層。第4層と共に溝1機能期の耕土層。

5A層　10G5/1緑灰色シルト質粘土。3㎜以下の細礫多量に含む。

5B層　7.5Y3/1オリーブ黒色礫混じり粘土。10㎜以下の中礫を中量含む。植物堅果を含む。

第6層　A層は本地区全域で見られる縄層。B層はA－6地区の撹乱によってA層が変移した層。

6A層　5BG4/1暗青灰色粗粒砂混じり粘土。5㎜大の中礫を含む。

6B層　10Y4/1灰色礫混じり粘土。5㎜以下の細礫～中礫を多量に含む。

第7層　A～Dに分層できた。冒頭に記した事由から7B～C層は、後日7A層の亜層として調査を進めたため、B地区(現遺部)のみに付した。また層内より獣骨が多数出土した。

7A層　7.5Y3/1オリーブ黒色礫混じり粘土。3㎜以下の細礫を中量含む。

7B層　10Y3/1オリーブ黒色礫混じり粘土。5㎜大の中礫を多量に含む。

7C層　7.5Y4/1灰色粘土。7B層より粘性強い。土師器・須恵器片を少量含む。7D層10Y3/2オリーブ黒色砂礫混じり粘土。10㎜以下の中礫・粗粒砂を含む。

第8層　B地区のみで確認された。

8A層　7.5GY3/1暗緑灰色砂礫層。〈上位・5～20㎜の中礫と粗粒砂〉〈下位・1～10㎜の中礫と細粒砂〉

8B層　2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土。植物遺体を微量に含む。

第9層　10G6/1緑灰色粗粒砂層。土師器・須恵器片を含む砂層。下位面に足跡遺構を検出。

第10層　A・B地区全域で確認された。

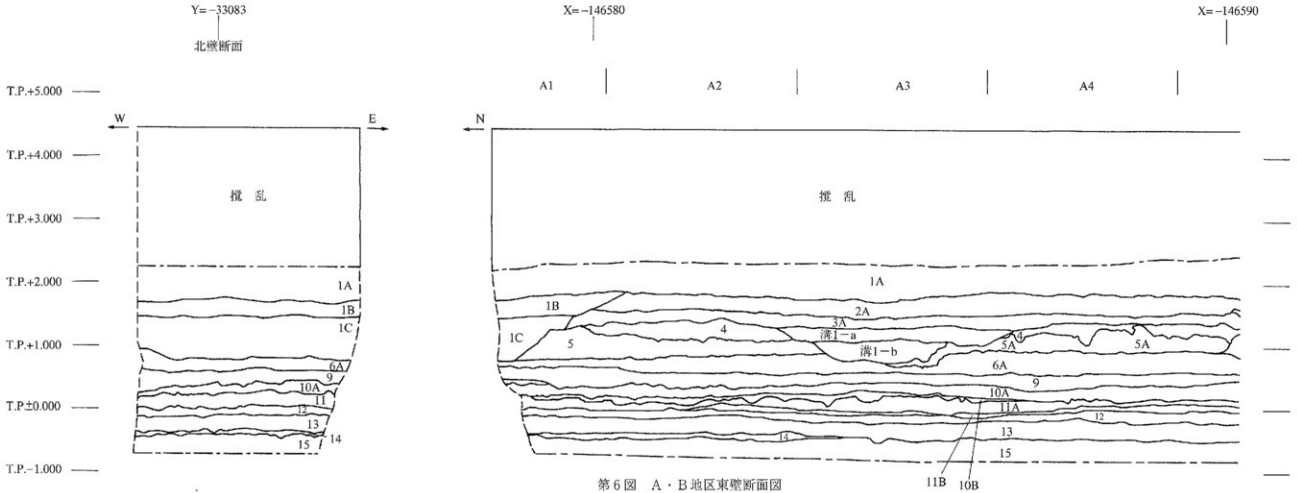
10A層　10Y3/1オリーブ黒色砂混じり粘土。

10B層　10Y4/1灰色礫混じり粘土。10㎜以下の中礫を少量含む。

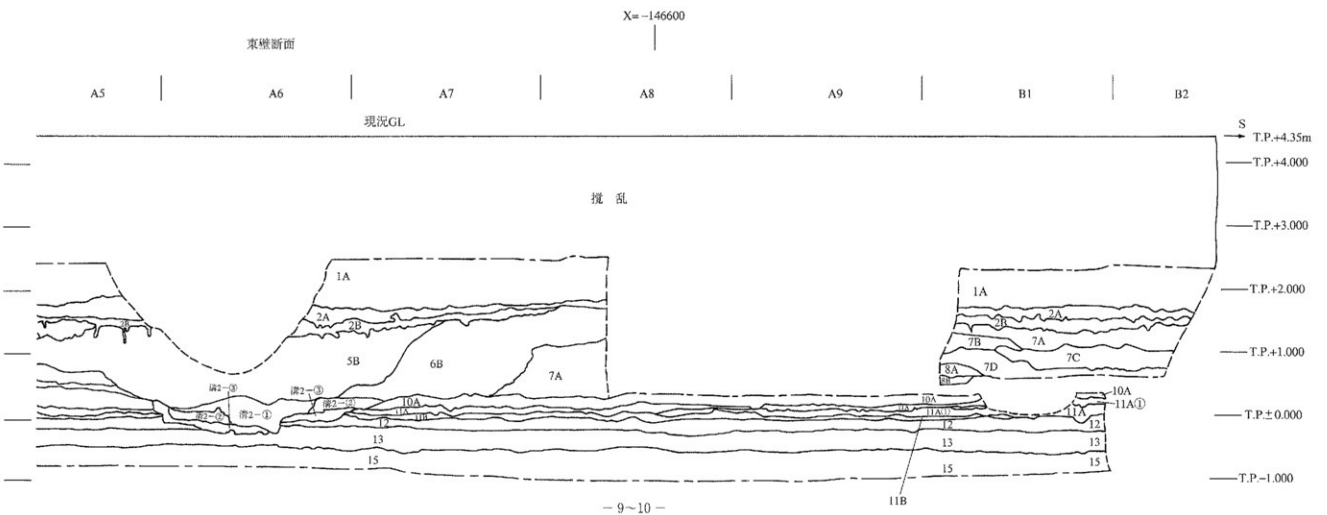
第11層　C地区の第９層に相当する。
　11A層　5GY2/1オリーブ黒色粘土。植物遺体の腐植土層。
　11B層　2.5Y3/1黒褐色粘土。炭化物を含む。
第12層　5Y3/2オリーブ黒色粘土。C地区の11A～C層(弥生時代中期遺物包含層)に相当する。
第13層　5Y2/2オリーブ黒色粘土。
第14層　2.5GY8/1灰白色粘土。下位に下がるほどシルトが強くなる。
第15層　5Y8/1灰白色粘土質シルト。

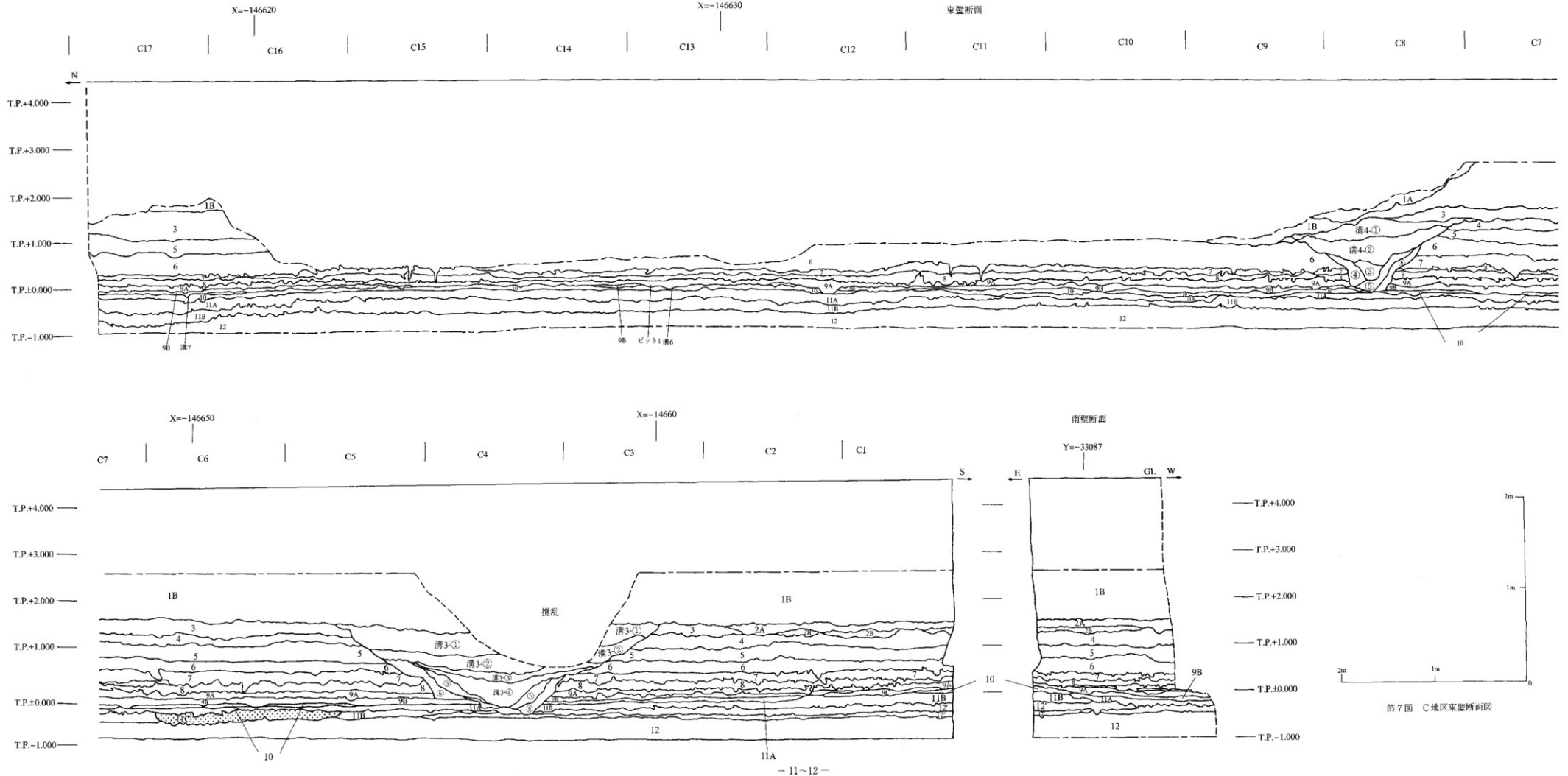
【C地区】

第１層　旧耕土・床土構成層。
　１A層　10G6/1緑灰色礫混じり粘土。３㎜以下の細礫を少量含む。植物遺体を少量含む
　１B層　10Y5/2オリーブ灰色粘土。5BG4/1暗青灰色粘土が斑点状に混入。
第２層　第１層以前の耕土層。
　２A層　7.5Y4/1灰色砂礫混じり粘土。８㎜以下の中礫を多量に含む。10Y2/1黒色粘土がブロック状に混入。
　２B層　10GY6/1緑灰色砂礫混じり粘土。粘土：砂礫＝８：２。
第３層　2.5GY3/1暗灰色礫混じり粘質シルト。３～10㎜以下の中礫を中量含む。
第４層　溝４の遺構構築面。近世期に相当する。
　2.5Y3/2黒褐色粘土。15㎜以下の中礫を少量含む。堅くしまる。
第５層　5BG4/1暗青灰色砂礫混じり粘土。粘土：礫(10㎜以下)：砂＝５：３：２。
第６層　5B6/1青灰色砂礫混じり粘土。中粒砂を多量に含む。墨書土器出土。
第７層　10Y6/2オリーブ灰色粘土質シルト。
第８層　7.5Y4/2灰オリーブ色シルト質粘土。須恵器(横瓶)の１個体が出土。
第９層　櫓(鏡状木製品)・杭穴を穿った建築部材・杭・棒状木製品を含む植物遺体の腐植土層
　９A層　7.5Y2/1黒色粘土。板細粒砂を含み、粘性が強い。
　９B層　7.5YR2/3極暗赤褐色粘土質シルト。植物遺体を若干含む。
　９C層　10Y5/1灰色粘土質シルトと5Y8/2灰白色粘土質シルトの混合層。
第10層　自然流路１のベースとなる。調査区南東隅（C－１）にて上面から切り込む流路の左岸を検出した。流路は南北トレンチに対して北東から南西へ縦断するため東壁断面では散見するにとどまる。(詳細は次章の自然流路１アゼ断面図を参照されたい。)
　10YR6/1褐灰色粘土。植物遺体を若干含み、堅くしまる。
第11層　弥生時代中期の遺物包含層。A地区の第12層に相当する。
　11A層　5Y4/1灰色粘土。炭化物を若干含む。植物遺体を少量含む。
　11B層　5Y4/1灰色～7.5Y2/1黒色粘土。植物遺体を中量含む。
　11C層　2.5Y2/1黒色粘土。C－５・７地区のみ確認された。弥生Ⅱ様式の土器が一括性を帯び出土。炭化物を多量に含む。土色・質において11B層との明確な違いを確認することは出来なかったが、遺物の量・炭化物の含有量が著しく多いため層名を分けて付した。
第12層　今回の調査区における最下層。T.P.-0.6m。A地区の第14・15層に相当する。
　〈上位〉10GY8/1明緑灰色粘土。粘性が強い。鉄分の含有量が高い。
　〈下位〉2.5GY6/1オリーブ灰色粘土質シルト。



第６図　Ａ・Ｂ地区東壁断面図





第7図　C地区東壁断面図

2）遺構

遺構の記述に関して、まずはじめに当調査区での遺構名・番号の付し方について触れておく。遺構名は土坑・溝・落ち込み・ピットを使用し、とくに溝に関しては人工的なものとそうではないもの、また流水を目的とするものと滞水を目的とするもの（掘り上げ田の井路）それぞれ検出したがその性格・機能に拠らず形状から判断し付した。各々の性格・機能については以下に詳述する。遺構番号は、前述したとおりA・B、C地区で調査工程に時間差が生じたため、検出順に付した。よって、遺構番号は遺構時期の序列とは対応しない。

【A・B地区】

溝1（第8図）

A地区北側、A－1～3地区で検出。東西方向の溝。第4層から切り込み、検出レベルはT.P.+1.3m、最下部はT.P.+0.7mを測る。断面形状は河道中心部が皿形を、北肩は2段のテラス状を呈する。幅は東端で6.5m、西端で6.8m、深さは東端で51cm、西端で40cmを測る。溝底面比高差は東端が9cm低いが、それを溝の流下方向とみなすかどうかはトレンチの形状などの条件から保留したい。前章「Ⅱ位置と環境」で述べたことを鑑みると、当調査区で検出される東西方向の溝は西へ流下することが考えられる。

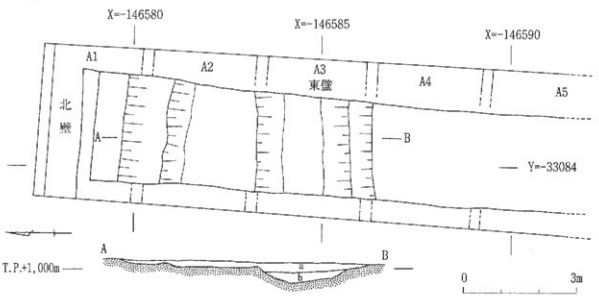
溝内堆積土は以下の2層に分層できた。

a：7.5GY5/1緑灰色粘土。0.3cm以下の細礫を中量含む。炭化物・植物遺体を若干含む。

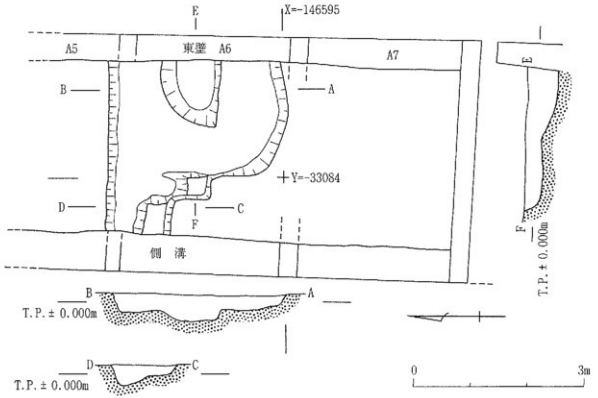
b：5BG4/1暗青灰色礫混じり粘土。2cm大の中礫を中量含む。炭化物・植物遺体を多量に含む。

遺構の性格として、堆積土は礫混じりの粘土を主体とする層であり常時水が流れていたとは言い難く、滞水下での堆積作用であろう。これは鬼虎川遺跡の所在する低湿地域で現在までも残る「掘り上げ田」及びそれに伴う「井路」・「かき池」であり、耕作地の冠水を防ぐために利用面積を減らしてまでも必要であったと思われる。

遺構構築時期は堆積土b層から近世期の陶磁器が数片出土していることから上限を該期に求めることができよう。



第8図　溝1実測図



第９図　溝２実測図

溝２（第９図、図版１）

Ａ地区中央、Ａ－５・６地区で検出。東西方向の溝。断面観察の結果、第６層上面から切り込む。平面検出レベルはその直上に撹乱があることからT.P.+0.3m、最下部はT.P.-0.3mを測る。溝さは推定で80cmを測る。断面形状は、東端では逆台形を呈し底面ほぼ中央で再度落ち込み、西端では北肩が直に落ち込み、南肩は緩やかな２段落ちを呈する。平面形状は、北肩が東西軸にほぼ沿うように直線ライン、南肩は西に向かうにつれ雪曲し溝幅を狭める。幅は東端で３m、西端で1.2mを測る。

溝内堆積土は東壁断面で以下の３層に分層できたが、基本的には黄灰色系の礫混じり粘土である。

①：10Y4/1灰色シルト質粘土。粘土：シルト＝７：３。植物遺体若干含む。

②：5Y3/1オリーブ黒色礫混じり粘土。粘土：礫(5mm以下)＝７：３。ブロック土。

③：2.5Y4/1黄灰色砂礫混じり粘土。粘土：礫(5mm以下)：中粒砂＝４：３：３。

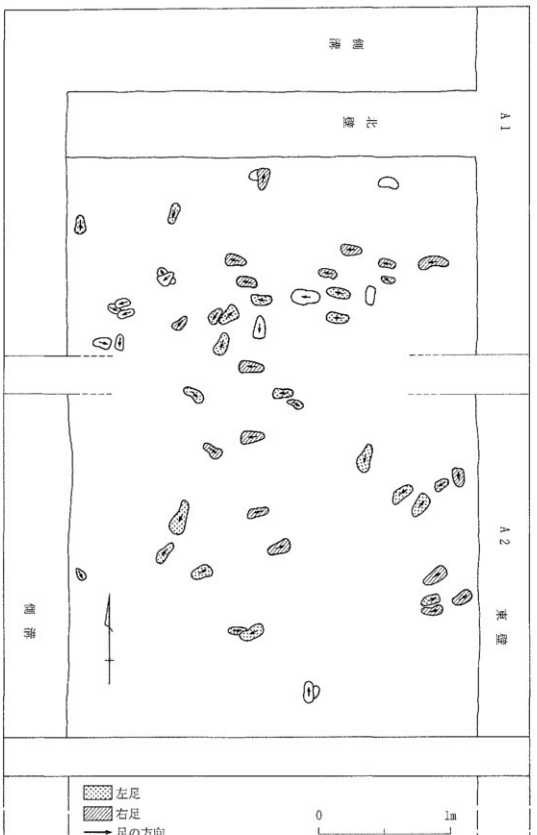
遺構の性格として、溝１と同様掘り上げに伴う井路であり、その末端であろう。

遺構構築時期は、遺物が未検出のため特定できないが、第６層から切り込むことから上限を中世期に比定することができる。

足跡（第10図、図版１）

Ａ地区北側、Ａ－１・２地区で検出。足跡は第10Ａ層（粘土）中にできた踏み込み痕に第９層（砂層）が充填したものである。残存状態は良好とはいえず、実測図には踏み込み痕断面よりも左右・前後の方向のわかる輪郭の鮮明なものを優先し記録した。方向性は一見ランダムに点在して見受けられるが、西行きが多い。

遺構構築時期は、第９層内から中世期の瓦器・土師器片が数点出土していることから、上限を該期及びその直前に比定することができる。



第10図　第９層下面足跡実測図

【C地区】

溝3（第11図、図版2・3）

C地区南側、C－3～5地区で検出。東西方向の溝。第3層上面から切り込み、底面最下部は第12層まで達する。断面検出レベルはT.P.+0.8m、最下部はT.P.-0.4mを測る。溝3は現代の建設物によって埋土の上位部分を破壊されている。よって平面実測図はT.P.+0.5mで作成した。断面形状は北・南肩とも2段落ちを呈する。平面形状は、北肩が東西軸に沿って直線ライン、南肩は南北に彎曲しながらも溝幅を保つ。底面には不定形の落ちを確認した。幅は東端で3.6m、西端で3.9mを測る。深さは、残存で1.2mを測る。溝内堆積土は以下の4層に分層できた。

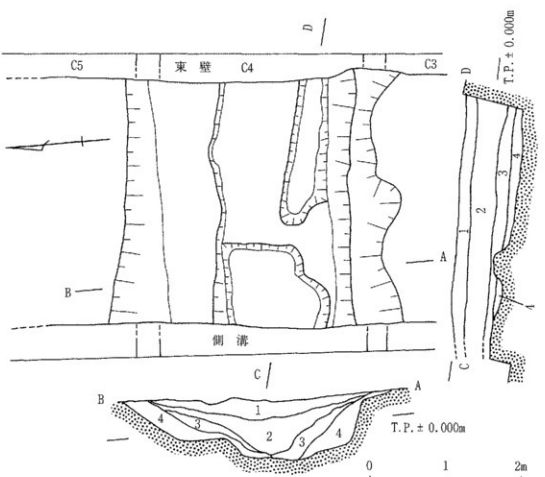
①：10GY5/1緑灰色中礫混じりシルト質粘土。5㎜大の礫を少量含む。

②：5GY5/1オリーブ灰色中礫混じりシルト質粘土。5㎜大の礫をブロック状に少量含む。植物遺体を中量含む。

③：7.5Y4/1灰色中礫混じり粘土。10㎜以下の礫を多量に含む。炭化物を少量含む。

④：5GY4/1暗オリーブ灰色中粒砂・中礫。15㎜大の礫を多量に含む。第11層がブロック状に混入する。瓦器椀片数点出土。

遺構の性格として、断面観察から少なくとも2度の開削が行われていることがわかる。④層堆積後再度開削され③から①の順に堆積した。遺構構築時期は出土遺物から上限を中世期に推定できる。



第11図　溝3実測図

溝４（第12図、図版４）

Ｃ地区中央、Ｃ－８地区で検出。東西方向の溝。第４層上面から切り込み、底面は第10層（T.P.-0.2m）に達する。断面形状は逆台形を呈し、北肩は前述のとおり撹乱によって破壊されている。埋土・堆積土は以下に分層できた。

ａ：10GY5/1緑灰色礫混じりシルト質粘土。５㎜大の礫を中量含む。堅くしまる。

ｂ：2.5Y6/1黄灰色礫混じり粘土質シルト。10㎜大の中礫を多量に含む。

ｃ：7.5Y5/1灰色砂混じり粘土質シルト。細粒砂～中粒砂のラミナが見られる。10㎜大の中礫を少量含む。ブロック状に第９Ａ層含む。

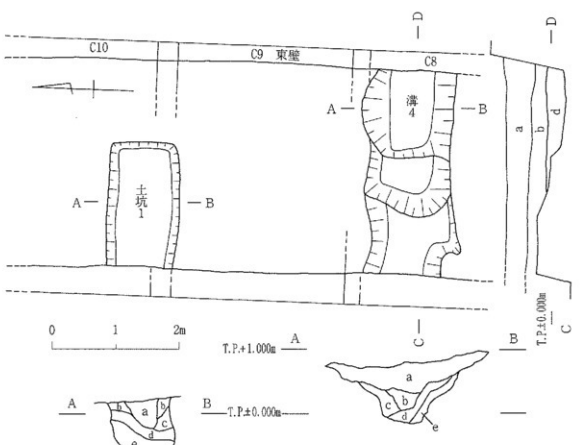
ｄ：5Y5/1灰色砂礫。中粒砂と10㎜大の中礫。

ｄ′：5Y5/1灰色シルト混じり砂礫。中粒砂と10㎜大の中礫。ブロック状にシルトが混入。

遺構の性格として、南肩に護岸・土留め目的の丸杭が打設されていることから掘り上げ田の井路である。これらは当該遺構に顕著に見られる形態である。遺構構築時期は層位から近世期と思われる。

土坑１（第12図、図版３）

Ｃ地区中央、Ｃ－９・10切梁下で検出。西端は矢板に切られ残存平面形は長辺を東西軸に持つ長方形で、短辺は最大0.9m、長辺は残存長２ｍを測る。断面形状は下膨れの袋状を呈する。埋土は以下



第12図　溝４・土坑１実測図

の５層に分層できた。

a：5Y4/1灰色砂礫混じり粘土。粘土を主体に粗粒砂と３㎜以下の中礫をブロック状に含む。人頭大の礫含む。崩滅の著しい土師器の口縁部１片出土。

b：7.5Y5/3灰オリーブ色砂礫。中粒砂に20㎜以下の中礫を少量含む。ドット状にａ層混入。

c：7.5GY5/1緑灰色礫混じり粗粒砂。

d：10Y5/1灰色砂混じりシルト質粘土。帯状に粗粒砂が見られる。

e：7.5Y6/1灰色砂混じり粘土。北底面に粗粒砂が、下位に第11層がブロック状に堆積。

遺構の性格として、ａ層より検出された人頭大の礫に規則的な配列は見られず、断面観察から当遺構廃絶時期に混入したと思われる。また、遺構内より獣骨が出土しておりウマの左下顎臼歯とイヌの軸椎の２点であった。遺構構築時期は、中世期と思われる。

自然流路１（第13図、図版６～８）

Ｃ地区中央以南、Ｃ－１～12地区で検出。底面比高差により北東から南西へ流下すると思われる。第10層上面から切り込み、検出レベルはT.P.+0.1m、最下部はT.P.-0.4mを測る。流路幅は当地区付近では推定10mを超え、流速はアゼの観察からさほど速くなかったと思われる。堆積土は３層に分層できた（第13図）。Ｃ－１・２地区左岸付近で流路最下層（９Ｂ層）から流向に沿った棒材と自然礫を検出した。棒材には一部加工痕が認められるものの、直立するものはなく上流から流されてきたものであろう［ＣＵＴ１］。Ｃ－11・12地区では、右岸に伴うピット群を検出したが、それら相互の関係はつかめない。流路内にもピットを検出していることから河岸設備であろう［ＣＵＴ２］。Ｃ－14・15地区では溝６・土坑・ピット群を検出した。溝６は自然流路１から派生する東西方向の溝で西に流下する。断面形状は浅い皿形を呈し、堆積土は９Ｂ層である。溝内から板材・棒材が出土した。ピット群は、ピット６を基点に南西・北西へと直線上に並ぶ状態で検出した［ＣＵＴ３］。柱材・杭材の残るピットは検出されなかった。Ｃ－17地区で東西方向の溝７・８を検出した。溝は浅く残存状態は悪い。おそらく一過性の流水作用で形成されたものであろう。遺構形成時期は土器の検出が皆無のため不明であるが、層位から上限を弥生時代中期、下限を古墳時代中期頃に比定できよう。

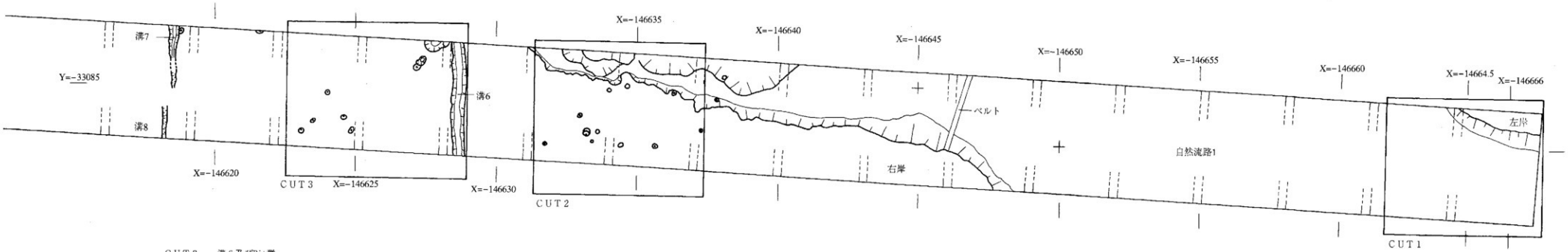
土器溜り（第14図、図版９）

弥生土器はＣ地区南側第11層中で散見され、特にＣ－５・６地区第11Ｃ層下位面にて出土頻度を増す。断面観察からは明確な掘り方は見られないが、土器と共に炭化した木材が出土している。土器の所属時期は大半が弥生時代中期前半から中頃（畿内Ⅱ～Ⅲ様式）に比定できる。実測図で完形に復元できるものは、長頸の広口壷（第15図６）と把手付鉢（第16図18）２点であった。器種別構成では壷と甕が圧倒的に多く、把手付鉢、手焙形土器（第16図23）など時期の下る弥生時代中期後半（畿内Ⅳ様式）所産の器種も若干見られる。また石包丁（第18図59・60）、石鏃（56）、剥器（58）など石製品も出土した。

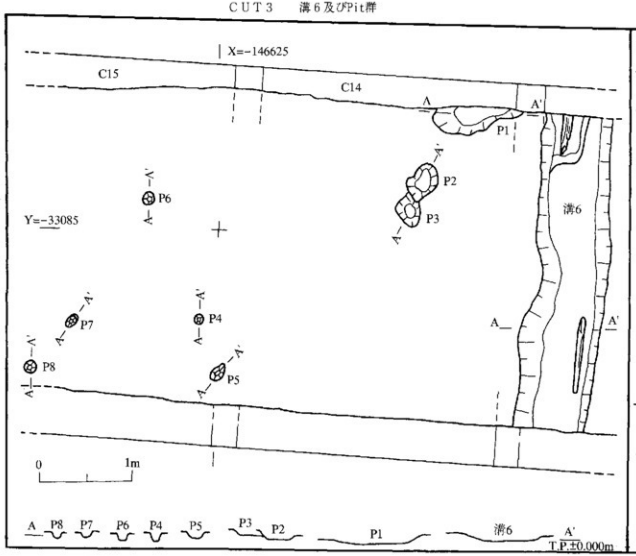
遺構の性格として、第11層下位面に上記の遺物及び炭化木が散乱している状況や、完形に復元できる土器が２点しかないこと、焼土面がないことから考えて単に遺物を廃棄した場所と思われる。現在までに鬼虎川遺跡の中心・居住域は本調査区の250m程南に推定されているが、該期の活動範囲を知る上で貴重な検出である。

この第11層弥生遺物包含層は、既往の調査においてもこれに相当する層は確認されており、遺構・遺物の有無・量は別として当遺跡および周辺における該期の鍵層になると思われる。

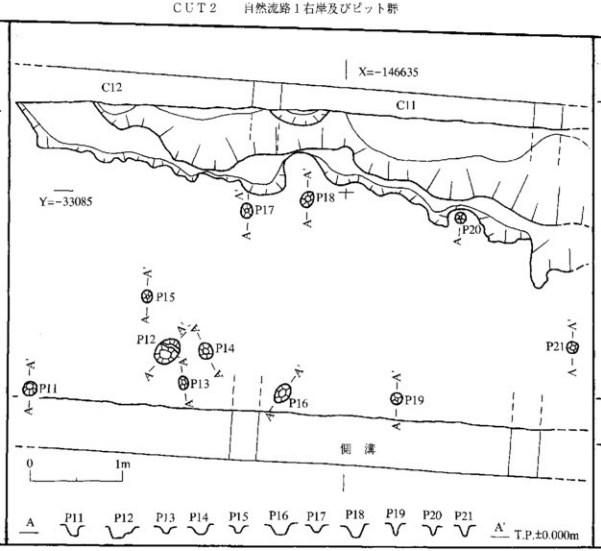
C１～７　第11層上面全体図



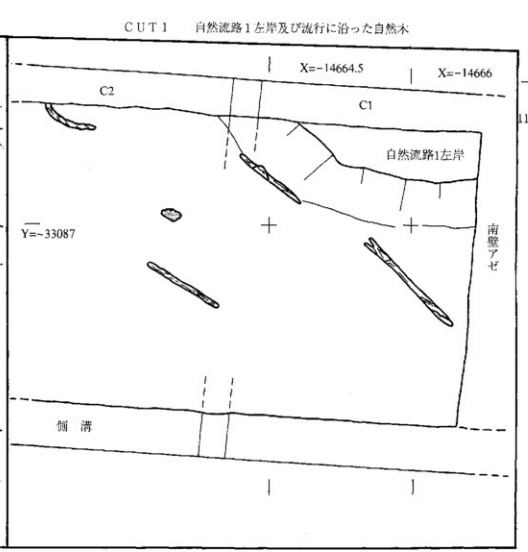
CUT３　溝６及びPit群

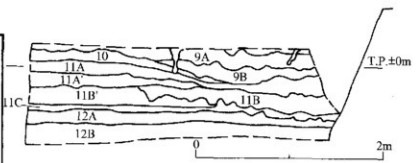


CUT２　自然流路１右岸及びピット群



CUT１　自然流路１左岸及び流行に沿った自然木



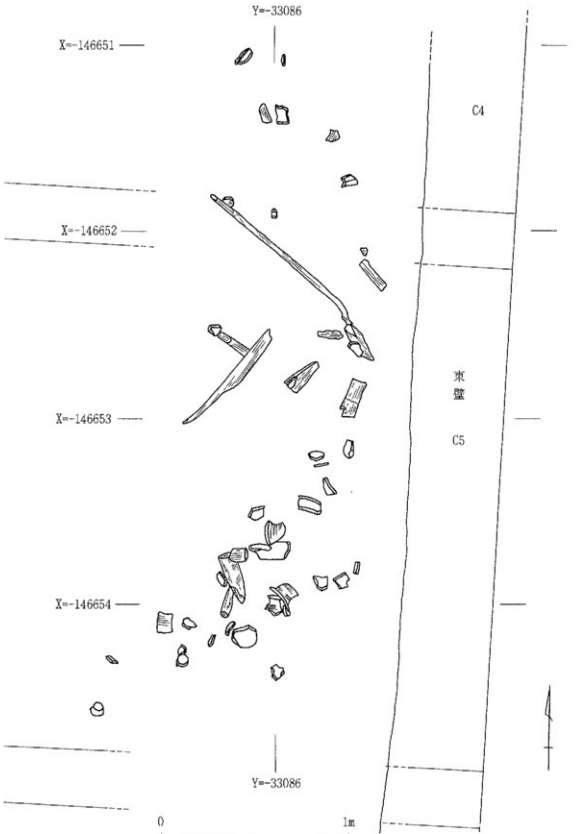


自然流路１

第13図　自然流路１実測図　（＊Ｐはピット）

９Ａ　7.5Y2/1 黒色粘土。極細粒砂含む
９Ａ′ 7.5GY6/1緑灰色粘土質シルトと９Ａ層の混合土。
９Ｂ　7.5YR2/3極暗褐色シルト質粘土。下位にラミナが見られる。
　　植物遺体多量含む。
　【９Ａ・Ａ′Ｂ層が自然流路１の堆積土】
10　10Y6/1　灰色粘土。自然流路１のベース。
11Ａ　5Y4/1　灰色粘土。植物遺体少量含む。
11′　5Y2/1　黒色粘土が11Ａ層に混入。植物遺体中量含む。
11″　2.5Y3/1 黒褐色粘土が11Ａ層に混入。植物遺体多量に含む。
11Ｂ　5Y4/1　灰色粘土。植物遺体中量含む。弥生中期の遺物包含層。
11Ｃ　2.5Y2/1　黒色粘土。下位に12Ａ層を巻き込む。弥生中期の
　　遺物包含層。
12Ａ　10GY8/1 明緑灰色粘土。当調査区の鍵層。
12Ｂ　2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土質シルト。最終掘削床。

自然流路１横断面層名表



第14図　第11層弥生土器出土状況実測図

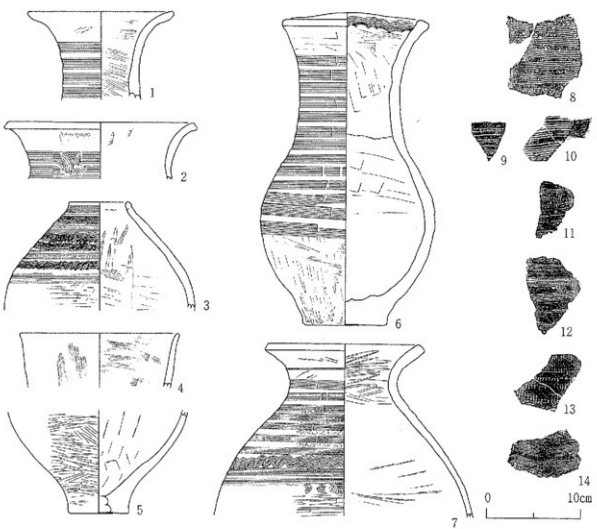
Ⅴ　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器・石製品・木製品・獣骨などである。所属時期は、弥生時代中期から近世まで、量の多少を問わなければ、各時代のものがある。遺物は出土品の少ないものについても図化するよう心がけたが、細片のために困難な遺物はなるべく図版に掲載するようにした。その他に、弥生土器・土師器については、胎土に角閃石を含み、茶褐色を呈するものを在地産とし、この種の土器と異なるものを他地域産とした。

1）土器

第11層出土土器（第15・16図1～27、図版10～13）

1～7・22は壺。1・6は長い頸部から、なだらかに外反する口縁部をもつ。1は外面に櫛描直線文（7/1.1cm）を施す。調整は内外面にハケメ（8/cm）が見られる。口径15.4cm。在地産。6は外面に櫛描直線文（6/1.0cm）、内面口縁端部に同原体による櫛描波状文が施される。調整はハケメ・板状工具・ヘラミガキが見られる。口径15.5cm、器高33.1cm、底径8.8cm。在地産。2・7は太く短い筒状の頸部と、外反する口縁部は肥厚する。2は外面に櫛描擬流水文（7/1.3cm）を施す。調



第15図　第11層出土土器実測図

整は内外面にハケメ（5/cm）が見られる。口径19.4cm。在地産。7は外面に櫛描直線文（6/0.8cm）・同原体による流水文・扇形文を施す。調整は外面にハケメ・ヘラミガキ、内面にはヘラミガキ・工具によるナデが見られる。口径15.8cm。在地産。3は丸味をもちながら内傾する体部から、口縁部につづく無頸壷。外面に櫛描直線文（9/1.1cm）と同原体からなる波状文を交互に施す。調整はハケメ・ヘラミガキが見られる。口径6.3cm。在地産。4は直線的に外方にのびる短い口頸部をもつ短頸壷。調整は内外面に細かいハケメ（19/cm）を施す。内外面共に煤付着。口径16.6cm。在地産。5は底部。外面にヘラミガキ、内面には工具によるナデ調整を施す。底径6.4cm。22は漏斗状の口縁部から、口縁端部は下方に拡張する広口壷。外面に櫛描簾状文（9/cm）を施す。内面は風化のため詳細不明。口径18.8cm。在地産。

8～14は櫛描文様のついた土器。8・10～14は壷体部、9は鉢の口縁部。8は外面に櫛描直線文（5/0.9cm）。在地産。9は外面に櫛描直線文（6/0.8cm）。在地産。10は外面に櫛描直線文（8/1.9cm）。在地産。11は外面に櫛描直線文（6/0.8cm）と波状文（同原体）。在地産。12は外面に擬流水文（11/1.6cm）。在地産。13は外面に幅の広い原体（/2.8m）をもつ櫛描簾状文。在地産。14は外面に櫛描流水文（8/1.1cm）。在地産。

15は甕蓋。「ハ」の字形に大きくひろがった口縁部から、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面に細かいハケメ（11/cm）が見られる。口径20.4cm。在地産。

16・17・19～21・24～27は甕。ゆるやかに外反する口縁部をもつ。16は内外面に工具によるナデ、外面にはヘラミガキ調整が施される。口径18.7cm。24は外面口縁部直下に櫛描直線文（10/1.6cm）を施す。調整は外面にハケメ、内面には工具によるナデ調整が見られる。口径24.4cm。在地産。25は内面に工具によるナデ調整、外面には煤付着のため詳細不明。口径26.1cm。在地産。26は内外面にハケメ（4/cm）、外面にはヘラミガキ・ヘラケズリ、さらに内面に工具によるナデ調整が施される。口径27.2cm。在地産。27は外面口縁部直下に櫛描直線文（9/1.9cm）を施す。調整は内面に工具によるナデが見られる。口径36.8cm。在地産。17・19～21は底部。17は中央部が上げ気味の底部から、直線的に外方にのびる体部。調整は内外面共に工具によるナデが施される。底径8.4cm。在地産。19は平底。調整は内面に工具痕、外面は風化のため詳細不明。底径4.0cm。在地産。20はミニチュア。調整は内外面共にナデを施す。底径2.8cm。在地産。21は外面に平行タタキ（4/cm）が施される。調整は内面にハケメ（9/cm）が見られる。底径5.0cm。在地産。

18は把手付小形鉢。コップ形。把手の痕跡を残す。調整は内外面ヘラミガキ、外面底部にヘラミガキのち周縁にハケメ（4/cm）が見られる。口径7.0cm、器高7.8cm、底径6.0cm。在地産。

23は手培形土器の体部。細かいキザミメをもつ2本の凸帯間に、櫛描波状文（3/0.8cm）と、3本単位の棒状浮文を施す。調整は外面ヘラミガキ、内面には工具によるナデが見られる。在地産。

第3層出土土器（第17図28、図版14）

28は須恵器杯身。たちあがりは短く内傾気味、端部は内側に段をもつ。外面底部に回転ヘラケズリが見られる。口径11.6cm。

第4層出土土器（第17図29、図版14）

29は瓦器椀の底部。内面にラセン状の暗文が施される。外面の高台は退化気味。高台径4.2cm。

第5層出土土器（第17図30～34、図版15）

30・31は伊万里焼碗。30は外面に山水の染付絵、内面口縁端部内側には2本の界線が見られる。口縁端部は口禿。口径11.6cm。31は外面にコンニャク印判による染付けとも見られる。高台脇には3本の界線、内面見込みには輪トチ痕が施される。

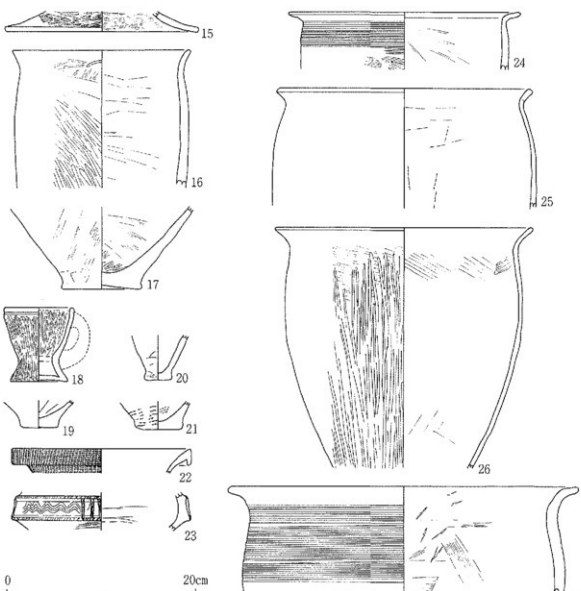
32は黒色土器内黒椀。「ハ」の字形にひろがる高台をもつ。高台径7.9cm。

32は須恵器提瓶の口縁部と思われる。調整は回転ナデを施す。口径6.6cm。

34は須恵器壺。肩の張る体部から、屈曲して外方に広がる口縁部。口縁端部はさらに外折し、丸くおさめる。調整は外面体部にカキメ、内面体部にはタタキが施される。口径10.0cm。

第6層出土土器（第17図38～47、図版15・16）

38・39は伊万里焼碗。38は外面に扇面文様の染付を4箇所、内面見込みにコンニャク印判を施す。外面底部と内面見込みに界線が見られる。高台畳付は無釉。高台径3.4cm。39は外面体部と内面見込みに染付絵を施す。外面底部と内面見込みに界線が見られる。高台畳付は無釉。高台径4.2cm。



第16図　第11層出土土器実測図

40は土師器大皿。外方に開く体部から、口縁部はそのままつづく。口縁端部は丸くおさめる。調整は内面ハケメ、外面には工具によるナデが施される。口径15.6㎝。

41は須恵器高杯。ラッパ状にひろがる脚柱部から、裾端部丸くおさめる。調整は回転ナデを施す。裾径8.9㎝。42は信楽焼徳利の底部。内部は素地、外面には鉄釉を施す。底径8.8㎝。

43は須恵器杯身。短いたちあがりから、わずかに内傾し形骸化した口縁部。内部見込みに一定方向のナデ、外面には灰かぶりが見られる。口径8.8㎝、器高2.6㎝。

44は墨書痕のある須恵器片。杯身外面底部に「主税」と書かれている。

45は須恵器壷の底部。「ハ」の字形にひろがる高台。調整は内外面ともに回転ナデを施す。高台径8.2㎝。

46は台付甕。「ハ」の字形に大きく広がる台部。底底部に回転ヘラケズリ、体部中央に凹線と櫛描列点文と、1箇所の円孔を穿つ。裾径6.6㎝。

47は須恵器甕。「く」の字形に外反する口縁部から、口縁端部は外側に肥厚する。調整は外面に平行タタキ、内面には青海波タタキが施される。口径22.0㎝。

第7層出土土器（第17図、図版17）

35は土師器鉢。内傾しながらたちあがる、口体部。調整は外面に1条の凹線とハケメ、内面は風化のため詳細不明。口径14.8㎝。在地産。

36は須恵器杯身。断面方形の高台をもつ。調整は回転ナデを施す。高台径10.1㎝。

第8層出土土器（第17図、図版17・18）

48・49は須恵器甕。48は外方に開く口縁部から、口縁端部は上下に拡張する。外面に櫛描波状文(7/㎝)を施す。口径22.6㎝。49は丸味をもつ体部から、屈曲して外方にひろがる頸部。外面に平行タタキ(3/㎝)、内面には青海波タタキを施す。ともにタタキのちナデ消す。

50は須恵器横瓶。横長の胴部をもつ。調整は外面に平行タタキのちカキメ、内面には同心円文タタキのちナデ消しを施す。

51は須恵器高杯の脚部。「ハ」の字形にひろがり、裾端部で外方に屈曲し、さらに下方へカギ形に曲げられる。長方形の透かし窓をもち、外面にカキメを施す。裾径8.4㎝。

52は土師器甕。「く」の字形に外反する口縁部から、口縁端部は上方に肥厚する。調整は外面ハケメ(6/㎝)、内面には板状工具によるナデが施される。口径21.4㎝。在地産。

53は土師器甕の底部。平底。内面に工具痕が見られる。底径5.4㎝。

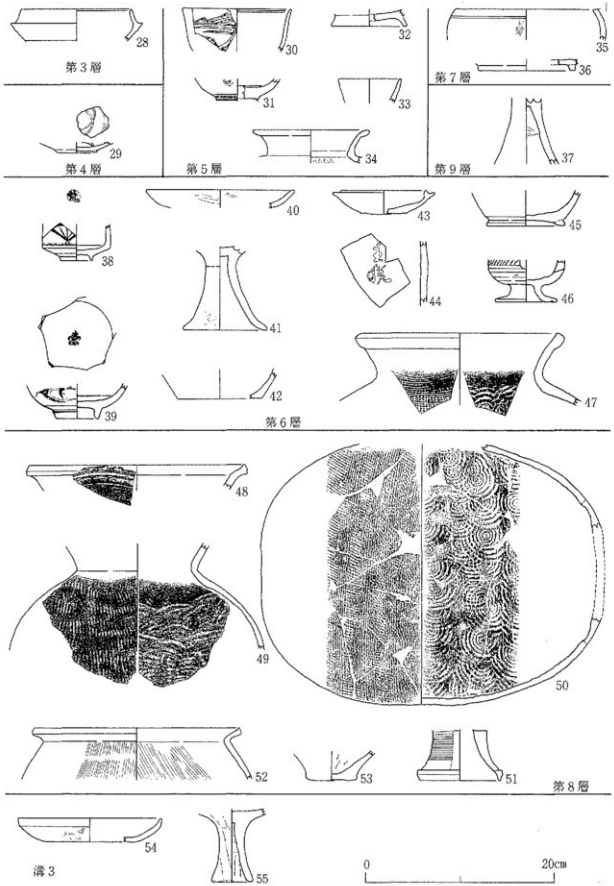
第9層出土土器（第17図、図版18）

37は土師器高杯。なだらかに広がる脚柱部。調整は内面工具によるナデ、外面は風化のため詳細不明。

溝3出土土器（第17図、図版18）

54は土師器大皿。径の小さな底部から、外方にひろがる体部。口縁部は屈曲して上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面に工具によるナデが施される。口径15.0㎝。

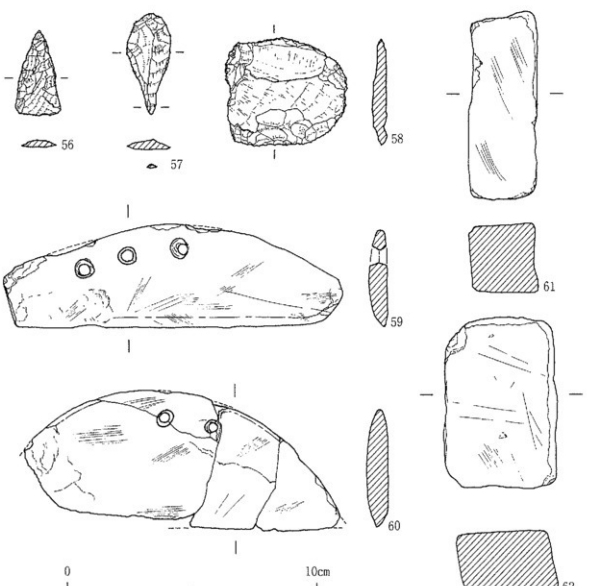
55は土師器高杯。小さく開く脚柱部から、裾端部は丸くおさめる。内面にはシボリメが見られる他は、風化のため詳細不明。裾径4.0㎝。



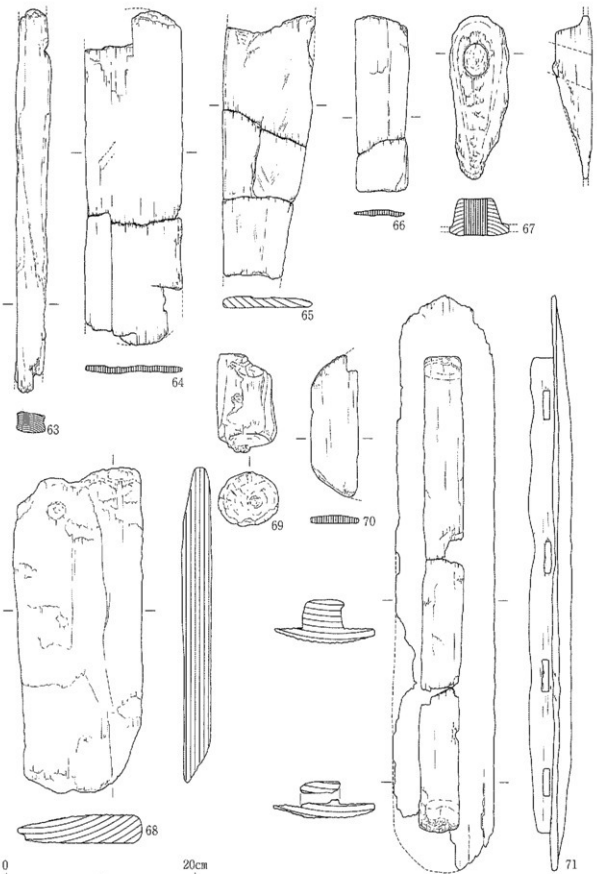
第17図　各遺構出土土器実測図

2）石製品（第18図56～62、図版19）

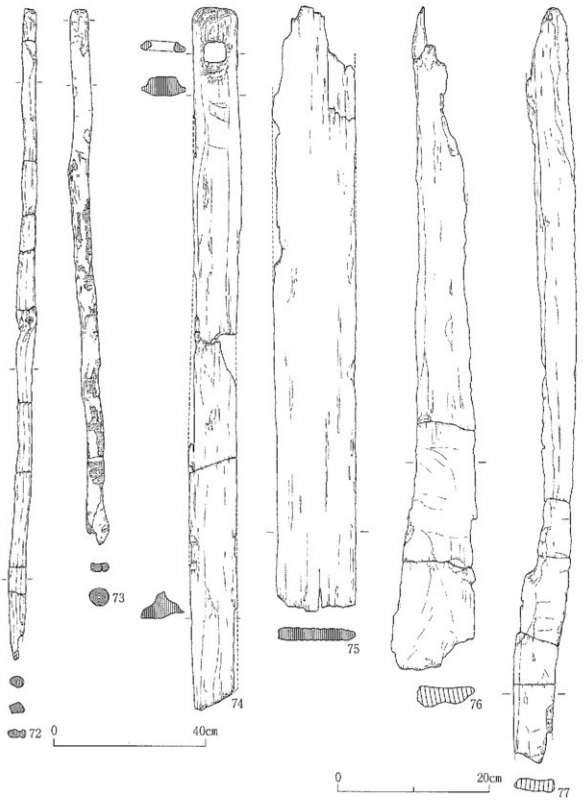
56は石鏃。平基式。横型剥片。製作途中の未製品か？長さ3.4cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重さ1.7ｇ。第11層出土。サヌカイト製。57は石鏃。頭部と錐部の境界が不明瞭で全体の形状が涙滴形に似ている。縦型剥片。長さ4.1cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ2.73g。サヌカイト製。58は削器。上下２箇所に刃部が認められる。１箇所には使用による折れが見られる。長さ4.3cm、幅4.9cm、厚さ0.6cm、重さ16.42g。縦型剥片。第11層出土。サヌカイト製。59・60は磨製石庖丁。共に直線刃半月形態。59は一端が平滑であることと、３箇所に穴がみられることから、大型の庖丁から欠損による転用であると考えられる。体部には砥石による研磨痕が認められる。片刃。長さ13.6cm、幅4.1cm、厚さ0.75cm、重さ61.84g。第11層出土。60は一部を欠損する。体部には砥石による研磨痕が認められる。片刃。長さ（12.8）cm、幅（5.8）cm、厚さ0.85cm、重さ67.06ｇ。第11層出土。61・62は砥石。共に全面を砥面とする。61は長さ7.6cm、幅2.8cm、厚さ2.8cm、重さ106.49g。１層出土。62は長さ6.9cm、幅4.6cm、厚さ2.5cm、重さ129.83g。床下出土。なお、この他の出土品については【表１】に掲載した。



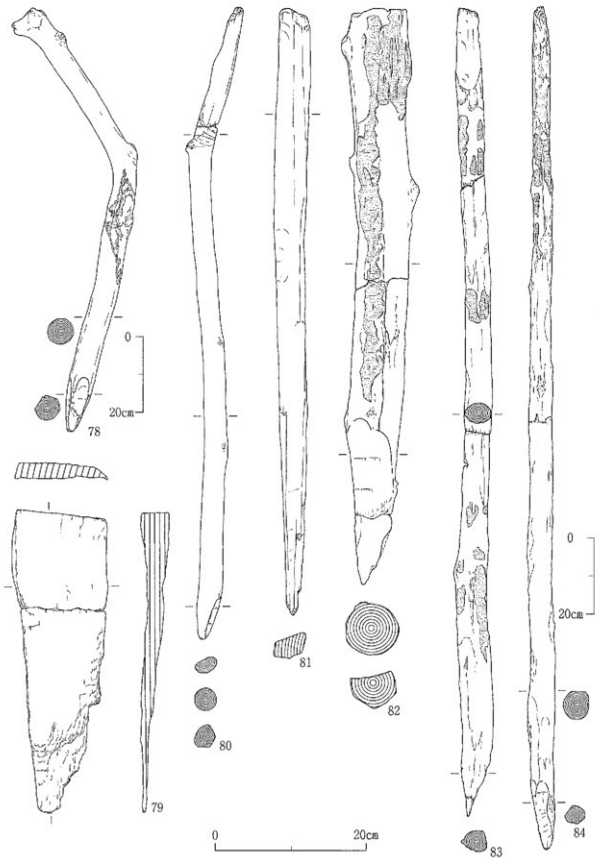
第18図　石製品実測図



第19図　木製品実測図



第20図　木製品実測図



第21図　木製品実測図

3）木製品（第19～21図、図版20～22）

66・70は曲物底板の一部と思われる。66は厚みを薄く加工している。長さ19.5m、幅5.7cm、厚み0.2～0.6cmo縦木取り。70は円形の底板の一部。周縁側縁には木釘穴は見られない。長さ14.9cm、幅5.0cm、厚み0.3～0.8cmo縦木取り。共にヒノキ材、第11層出土。67は鍬の舟型突起部分である。柄孔には柄が残存する。長さ17.2cm、幅6.2cm、厚み0.4～4.1cmo遺存状態不良。カシ材。第11層出土。69はもじり編み用木錘と思われる。残存状態から、丸太のままで無加工の状態。長さ10.5cm、幅6.2cm、厚み5.7cmo71は櫛。削り出しによる表面に隆起を施す。滑走板は先端部が反り上がり、滑走面は曲面を呈す。隆起部は上面を平坦にし、高さ4.5cmになる。また隆起部側面に方形孔が4箇所穿たれている。さらに隆起部上から見て、左に偏っていることから、一対の櫛の右側に相当すると思われる。長さ60.3cm、幅10.8cm、厚み0.5cmo カシ材。第11層出土。64・65・68・75・79は板状加工木。64は長さ35.1cm、幅10.2cm、厚み0.4～0.8cmo第11層出土。65は長さ27.7cm、幅9.5cm、厚み0.3～1.2cmo第11層出土。68は著しい焼け痕のため表面炭化する。長さ34.2cm、幅12.3cm、厚み0.5～3.0cmo第11層出土。75は遺存状態不良。長さ79.3cm、幅10.2cm、厚み0.6～1.7cmo第９層出土。79は一部加工による段をもつ。長さ39.5cm、幅12.7cm、厚み0.3～4.1cmo カシ材。溝６出土。63・72～74・76・77は加工木。63は長さ40.3cm、幅3.7cm、厚み1.3～2.2cmo第10層出土。72は丸太を縦に割材したもの。長さ170.7cm、幅5.2cm、厚み0.9～3.0cmo第９層出土。73は表面には樹皮が残り、小枝を取り去る程度の加工。杭の未製品とも考えられる。長さ139.7cm、幅10.6cm、厚み0.4～4.4cmo第９層出土。74は一端に方形孔を穿つ。長さ184.3cm、幅14.0cm、厚み1.5～6.9cmo第９・10層出土。76は表面に無数の工具痕が見られる。長さ87.1cm、幅10.9cm、厚み0.4～2.7cmo第１層出土。77は長さ99.0cm、幅8.5cm、厚み0.8～1.7cmo第１層出土。78・80～84は杭。78は表面に樹皮が残り、小枝を取り去る程度の加工。長さ110.7cm、幅6.8cm、厚み1.0～6.7cmo丸木。第２層出土。80の一端に丸太を半分に加工する部分が見られる。全体には樹皮を取り去る程度の加工。長さ83.2cm、幅3.5cm、厚み0.8～3.5cmo丸木。溝３出土。81は丸太を割材したもの。表面には工具痕が見られる。長さ79.7cm、幅4.7cm、厚み1.3～3.8cmo溝６出土。82～84は表面に樹皮が残り、小枝を取り去る程度の加工。82は長さ75.6cm、幅10.3cm、厚み6.9cmo丸木。第11層出土。83は長さ105.9cm、幅4.4cm、厚み2.7cmo丸木。第１層出土。84は表面に樹皮が残り、小枝を取り去る程度の加工。82は長さ75.6cm、幅10.3cm、厚み6.9cmo丸木。第11層出土。83は長さ105.9cm、幅4.4cm、厚み2.7cmo丸木。第１層出土。84は長さ220.4cm、幅7.2cm、厚み7.3cmo丸木。第９層出土。

打製石器

No.	挿図No.	器種	長さ（cm）	幅（cm）	特徴
1		C-5-6 11層下位 土器溜り NO.15	34.73	断片	石鏃破片。裏面に敲打。
2		C-6 第11b～C層中～下位 NO.16検出 土器溜まり	3.58	断片	
3		C-6 第11b～C層中～下位 NO.16検出 土器溜まり	0.47	断片	
4		C-6 第11b～C層中～下位 NO.16検出 土器溜まり	0.16	断片	
5		C-1・2 第4層 黒色粘土 強作業	5.38	断片	一辺に敲打。
6		C-6 第11C層 アゼ内	2.23	断片	
7		C-16 第3小段面 礫ラベルト	4.77	断片	一辺に敲打。
8		C-7 第11B層 アゼ内	0.80	断片	
9		C-5 第11B層中～下位 NO.15～16検出	2.82	断片	
10		C-5-6 第7層 繋度アゼ	5.80	断片	一辺に敲打。風化してる。
11		C-5 第11C層 アゼ内	7.50	断片	
12		C-6 第11C層 アゼ内	1.90	断片	
13		C-5-6 第11C層下位面 土器溜 0.2層	1.94	断片	
14		C-6-5 第11C層下位面 土器溜 0.2層	1.62	断片	
15	56	C-5 第11B層中～下位 NO.15～16検出	1.70	石鏃	平基式。製作途中品。板型剥片。
16	58	C-5-6 第11C層下位面 土器溜まり	16.42	掻器	横型剥片。
17	57	A2 灰白色粘土 検出F.P.-0.453	2.73	石鏃	無茎。横型剥片。

磨製石器

1	59	C-14 F.P.-0.361 第11a層下位 NO.11～16検出	61.84	石庖丁	頁岩製。磨製品。
2	60	C-5-6 第11C層下位面 土器溜まり	67.07	石庖丁	大型。偏刃。磨製。
3	62	C検区 床土下砂土 先トレ 西落ス1	129.85	磨石	全面研磨。
4	61	C-7 1層	100.69	磨石	全面研磨。
5		C-5-6 7層下層 黒色粘土 先行トレンチ	5.25	石錘？	穿孔。

第１表　石器観察表

4） 動物遺体　　安部みき子（大阪市立大学医学部解剖学第二講座）

中世から近世の層より出土した10片の動物遺体の保存状態は良好であり、同定できたものはニホンジカ3片、イヌ1片とウマ3片であり（第2表）、計測できたものもあった。シカの計測にはDriesch（1976）を、イヌには斎藤（1963）を主に用いた。シカは第3腰椎と仙骨の外側部、左上腕骨が出土し、その大きさから成体と思われる。上腕骨は大結節が破損しているのみであり、計測できた部位を奈良公園に生息している現生ニホンジカのメスの生体と比較すると、本遺跡のシカの方が上腕骨長で約30㎜大きく、その他の計測部位でも出土したものの方が大きかった（第3表）。この結果、出土したシカはオスの成獣であると推測される。イヌは第2頚椎が出土しているのみであり、計測値から中型犬の大きさの範囲である。縄文時代晩期後葉の岐阜県羽沢貝塚出土のイヌと比較すると、本遺跡のものの方が全長で約10㎜大きいが前関節突起間幅では良く似た値を示した（第4表）。ウマは下顎の臼歯が出土しているが、出土場所が異なるため同一固体とは断定できなかった。残りの3片のうち2片はウシまたはウマの胸骨体の一部と剣状突起であり、同一固体のものと思われる。他の1片はシカまたはイノシシと思われる肋骨片であった。

第2表　鬼虎川遺跡出土の動物遺体一覧表

番号	地区	層位	出土年月日	時期	出土動物遺体			
					種名	左右	部位	詳細
1	C−7・8	第6層	1999/11/16	中世〜近世	シカ	左右	上腕骨	大結節破損
2	A−8	第7層	1999/11/17	中世〜近世	ウシorウマ	−	胸骨	胸骨体の一部
3	A−8	第7層	1999/11/17	中世〜近世	ウシorウマ	−	胸骨	胸骨体の一部と剣状突起
4	A−8	第7層	1999/11/17	中世〜近世	シカ	−	仙骨	右の外側部
5	A−8	第7層	1999/11/17	中世〜近世	シカ	−	第3腰椎	
6	A−8	第7層	1999/11/17	中世〜近世	シカorイノシシ	不明	肋骨	肋骨体
7	A−7・8	第7層	1999/11/16	中世〜近世	ウマ	右	頚骨	近位端破損
8	C−8	溝4	2000/1/20	近世	ウマ	左	頚骨	骨幹のみ
9	C−16	土坑1	2000/1/20	中世	ウマ	左	下顎　臼歯	近遠心径28.86　頬下径16.16
10	C−10	土坑1d・e層	2000/1/27	中世	イヌ	−	軸椎	

第3表　シカの上腕骨の計測値

	鬼虎川	奈良公園メス（成獣）
上腕骨長（骨頭〜遠位端）	183.38	152.26
骨幹中央横径（三角筋粗面下端）	19.39	17.41
骨幹中央前後径（三角筋粗面下端）	25.26	20.8
上腕骨滑車横径	35.76	33.73
上腕骨滑車前後系	26.77	22.35

第4表　イヌの軸椎（第2頚椎）の計測値

	鬼虎川	羽沢貝塚
全長	47.81	39.52
前関節突起間隔	24.81	24.52
前椎孔最大幅	10.88	
前椎孔高径	11.40	
椎体最大長（歯突起尖より）	41.97	
椎体長	35.94	

計測値の単位は㎜

参考文献

Driesch. Angela　1976　A Guide to the Measuremento of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1. Harvard UNV.

斎藤　弘吉　1963　犬科動物骨格計測法　私版

安部　みき子・岩田　榮之　2000　岐阜県羽沢貝塚出土のイヌ骨に付いて．羽沢貝塚発掘調査報告書　南濃町教育委員会　180−188.

Ⅵ　まとめ

今回の調査成果をもとに遺構・遺物について若干の瞥見を述べることでまとめに代えておきたい。

1）自然流路１に画される弥生時代中期集落の北辺境界（第22図[1]）

今回の調査区で確認した自然流路１（第22図①）は、Ｘ＝－14663m付近で右岸を、南東隅で左岸を検出した。土器の検出は皆無であったが、その下層でⅡ・Ⅲ様式の土器溜りを確認していることから該期以降の所産と考えられる。流路幅は推定で10mを超え、底面比高差から南西に流下することが確認された。その延長には第13次調査埋没谷[2]・第19次調査落ち込み[3]（第22図②・④）が存在し、堆積土も植物遺体を多量に含む黒色粘土で自然流路１と類似する。遺構形成時期は堆積土内下層でⅡ・Ⅲ様式の土器片が出土していることから矛盾しない。第19次Ｂ～Ｅ地区調査では被服団地前交差点西側で環濠を確認しており今回のそれはこの環濠の外側を流下していたことが判明した。また同時期の遺構として西100m地点でＳＤ01～04が検出[4]されている（第22図③）。南域に広がっていた集落の排水ないし水田に伴う溝として自然流路に伴う機能を有していたことが推測される。以上のことから勘案して、自然流路が概ね弥生時代中期に相当する集落の北辺を規制していた景観を窺うことができよう。

2）「主税」と書かれた土器

第49次調査の第6層で「主税」の銘を持つ墨書土器が出土している。第６層は前述のように、飛鳥時代から江戸時代の遺物を包摂することから、堆積時期の下限を江戸期におかざるを得ない。従ってその層中から出土した墨書土器についても時期の特定は困難である。概ね墨書土器が盛行する奈良～平安時代前期に措定することとしたい。さて、最近の墨書土器研究の成果[5]では、宮都・官衙出土例と集落出土例について墨書の内容に差があることが指摘されている。集落の例では1字銘が圧倒的で、祭祀や儀式に伴って使用されたことが推測されている。一方、宮都・官衙例では固有名詞としての使用例が頻出する。このように土器に墨書することの意義付けについては出土遺跡の性格で被別する必要が生じている。ところが、今回の「主税」例は、以下に述べるように固有名詞としての使用例と考えられる。

「主税」といえばまず民部省管下の官庁である主税寮を指すと考えるのが至当である。主税寮は地方の財政収支を監査する。『職員令』主税寮条[6]に、

主税寮。頭一人。掌。倉廩出納。諸国田租。舂米。碾磑事。助一人。大允一人。少允一人。大属一人。

少属一人。算師二人。掌。勘計租税。史生四人。使部廿人。直丁二人。

とある。ここで文中の「倉廩」とは次に「諸国田租」とあることから地方の田租を蓄積する倉の謂であることがわかる。同条の「義解[7]」に、「京国官倉蓋蔵及出納。其在京者主税自検校。在外者拠帳知之。」とあるから、京外の「倉廩出納」については、正税帳ほかの書類を利用していることが知られる。以上のことから、「主税」銘の墨書土器は在地の田租倉廩の出納に伴う何らかの用途を有していたと考えられる。

[1] 22図は鬼虎川遺跡第49次調査地を基点とし、周辺の調査で検出された遺構を座標値とともに補集・合成したものである。
さらに現況の地形位置関係を示すために、大阪府八尾土木事務所提供の周辺地図と重ねたものである。

[2] 国道308号線関係遺跡調査会『鬼虎川遺跡－東大阪市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う発掘調査概要（その２）－』、1981年。

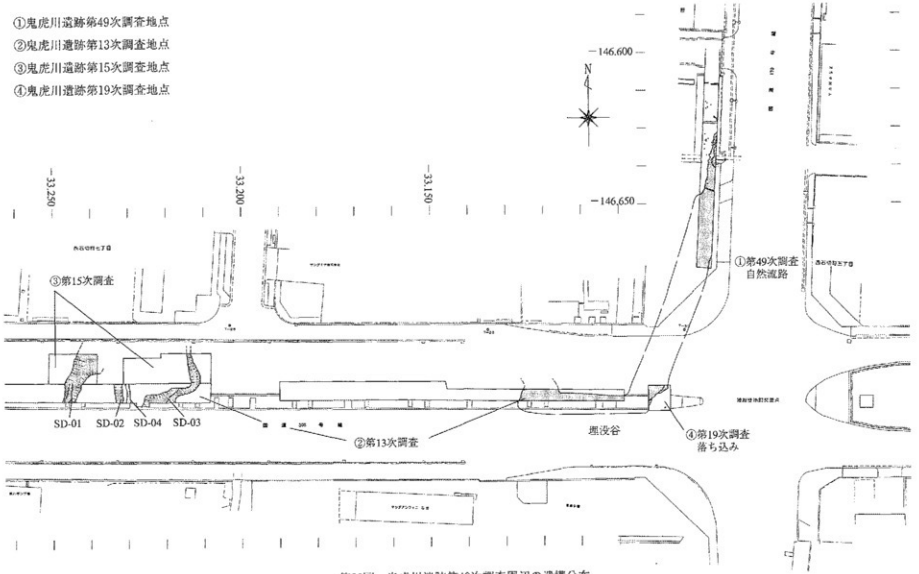
[3] 東大阪市教育委員会（財）東大阪市文化財協会『鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告』、1988年。

[4] （財）東大阪市文化財協会『鬼虎川遺跡－東大阪市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う第15次発掘調査概要（その２－２）－』、1983年

[5] 例えば、平川南『墨書土器の研究』、2000年、吉川弘文館。など。

[6] 本文は、井上光貞ほか校注『律令〔日本思想大系３〕』、1978年、岩波書店。に拠った

[7] 本文は、黒板勝美ほか編輯『新訂増補　国史大系　令集解第一』1978年、吉川弘文館。に拠り、新字に改めた。



第22図　鬼虎川遺跡第49次調査周辺の遺構分布

付．鬼虎川遺跡第49次調査出土木製品の樹種分析

㈱東都文化財保存研究所

はじめに

鬼虎川遺跡では、弥生時代中期を中心に、古墳時代、中世以降等の木製品が多数出土している。これらの木製品については、これまでにも各調査区で樹種同定が実施されており、用途別の用材選択の様子が明らかになりつつある。

本報告では、第49次調査で出土した弥生時代中期、弥生時代～古墳時代、中世以降の木製品について樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。なお、番号は挿図のそれと対応している。

1）試料

試料は、第49次調査で出土した木製品22点（63～84）である。このうち、67は、鍬の身と柄の2点について樹種同定を行う。そのため、合計点数は23点である。これらのうち、67の身は炭化していた。

2）方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

炭化材は、乾燥させた後、3断面の破断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3）結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は、針葉樹5種類（マツ属複維管束亜属・モミ属・スギ・ヒノキ・イヌガヤ）、広葉樹7種類（コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・ヤマグワ・クスノキ・シキミ・サカキ・ハイノキ属ハイノキ節）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen.　Diploxylon）　　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・モミ属（*Abies*）　　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don）　　スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.)Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・イヌガヤ（*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch f.）　イヌガヤ科イヌガヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。樹脂細胞が早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～2個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. Cyclobalanopsis）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・スダジイ（*Castanopsis cuspidata* var. sieboldii (Makino) Nakai）　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有するが、小道管には希に階段穿孔が認められる。道管内壁の壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）　クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は1～5列、孔圏外への移行はやや緩やかで、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・クスノキ（*Cinnamomum camphora* (L.) Presl）　クスノキ科クスノキ属

散孔材で、道管は比較的大径、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。

・シキミ（*Illicium anisatum* L.）　シキミ科シキミ属

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2～4個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～2細胞幅、1～20細胞高。

・サカキ（*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.）　ツバキ科サカキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。

・ハイノキ属ハイノキ節（*Symplocos* sect. Lodhra）　ハイノキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～5個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～3細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。

4）考察

樹種同定を行った木製品は、弥生時代中期の楯、鍬（身・柄）、板状加工木、容器、錘、杭、弥生時代～古墳時代の板状加工木、杭、加工木、中世以降の杭である。

今回の弥生時代中期の櫓は、針葉樹のマツ属複維管束亜属であった。本遺跡の櫓については、遺跡周辺に広がる低湿地内や干潟、または集落内での運搬等に利用されたと考えられている（芋本，1987；奈良国立文化財研究所，1993）。マツ属複維管束亜属を利用した櫓は、本遺跡や宮ノ下遺跡でも確認されており（島地ほか，1987；パリノ・サーヴェイ株式会社，1996）、櫓としてよく使われる種類であったことが推定される。ただし、櫓の樹種としては、マツ属複維管束亜属の他にも、ハンノキ属、シキミ、クスノキ科などが確認されている。これら種類の違いは、櫓を使用する環境の違いを反映した可能性がある（パリノ・サーヴェイ株式会社，1996）。そうだとすれば、マツ属複維管束亜属は材質が松脂を多く含み、耐水性に優れることから、湿地や干潟など、湿った環境で利用されていた可能性がある。

鍬の身はアカガシ亜属、柄はサカキであった。鍬の身にアカガシ亜属が利用される例は、本遺跡をはじめ、周辺遺跡でこれまで出土した鍬・鋤類にも多数確認されている（松田，1980；島地・伊東，1988；鳴倉，1990；奈良国立文化財研究所，1993）。鍬の身の形態には、様々な形態がある。このような形態の違いは、民俗事例などから耕作地の環境、耕作目的、時期の違い等を反映している可能性がある。しかし、樹種同定結果を見る限りでは、形態の違いによる種類の違いは認められず、その多くがアカガシ亜属である。このことから、鍬の用材としてアカガシ亜属が選択的に利用されていた可能性があり、今回の結果もその一例といえる。一方、柄については、身と同じアカガシ亜属の利用例が多いが、アカガシ亜属以外にも様々な種類が利用されている（島地・伊東，1988）。その中で、サカキは比較的よく利用される種類の一つである。アカガシ亜属ほどの大径木は少ないが、比較的強度が高いことから、柄等に利用されたことが考えられる。

容器は、70が曲物の底板状、66が箱の側板状を呈し、いずれも板状の加工を施す点で一致している。樹種はいずれもヒノキであった。本遺跡から出土した容器では、高杯については、これまで出土したほとんどがヤマグワであり、選択的な利用が指摘されている（林ほか，1988；パリノ・サーヴェイ株式会社，1996）。一方、槽や曲物では針葉樹のヒノキ属やコウヤマキが多く見られ、今回の結果とも調和的である。木理が通直で加工が容易なことに加えて、耐水性・防虫性に優れた材質を有していることも考慮されたと考えられる。板状加工木4点のうち、3点にヒノキやスギが利用されていることについても、同様の用材選択が指摘できる。アカガシ亜属の板状加工木については、強度などを考慮した用材選択が推定され、ヒノキとは用途が異なる可能性がある。

杭材には、弥生時代～古墳時代にモミ属、アカガシ亜属、ヤマグワ、中世以降にシキミが認められた。点数が少ないため、時代による種類構成の違いは不明である。しかし、弥生時代～古墳時代では、点数に対して種類数が多く、様々な種類が利用されていたことが推定される。同様の傾向は、本遺跡の第5次調査や宮ノ下遺跡第1次調査などでも認められている（林ほか，1988；パリノ・サーヴェイ株式会社，1996）。これらの結果から、杭材には遺跡周辺に生育し、入手が容易な樹木を種類に関係なく利用していたことが推定される。

弥生時代～古墳時代の加工木は、針葉樹のモミ属、ヒノキ属、広葉樹のスダジイ、アカガシ亜属、ハイノキ節が見られ、様々な種類が利用されていたことがうかがえる。いずれも棒状を呈するが、丸材やミカン割状など、加工法に違いが認められる。そのため、加工木の中には複数以上の用途が推定され、用途によって用材選択が異なっていた可能性がある。しかし、詳細は不明であり、過去に出土した同様の製品も含めて形状分類した上で、樹種と形状の関係など検討することが必要である。

挿図番号	器種		年代	樹種
63	加工木		弥生～古墳時代	ヒノキ
64	板状加工木		弥生時代中期	ヒノキ
65	板状加工木		弥生時代中期	クスノキ
66	曲物底板		弥生時代中期	ヒノキ
67	鍬	柄	弥生時代中期	サカキ
		身	弥生時代中期	コナラ属アカガシ亜属
68	板状加工木		弥生時代中期	ヒノキ
69	鍾		弥生時代中期	イヌガヤ
70	曲物底板		弥生時代中期	ヒノキ
71	鍬		弥生時代中期	マツ属複維管束亜属
72	加工木		弥生～古墳時代	スダジイ
73	加工木		弥生～古墳時代	ハイノキ属ハイノキ節
74	加工木		弥生～古墳時代	モミ属
75	板状加工木		弥生～古墳時代	スギ
76	加工木		弥生～古墳時代	コナラ属アカガシ亜属
77	加工木		弥生～古墳時代	コナラ属アカガシ亜属
78	杭		弥生～古墳時代	ヤマグワ
79	板状加工木		弥生～古墳時代	コナラ属アカガシ亜属
80	杭		中世以降	シキミ
81	杭		弥生～古墳時代	モミ属
82	杭		弥生時代中期	コナラ属アカガシ亜属
83	杭		弥生～古墳時代	コナラ属アカガシ亜属
84	杭		弥生～古墳時代	モミ属

第5表　樹種同定結果一覧表（番号は第19～21図の挿図番号と対応）

《引用文献》

林　昭三・島地　謙・植田弥生（1988）出土木製品の樹種（第4・5次）.「鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ遺物編木製品」, p.69-96, 財団法人東大阪市文化財協会.

芋本隆裕（1987）弥生時代の鍬.「鬼虎川の木質遺物　－第7次発掘調査報告書　第4冊－」, p.75-77, 財団法人東大阪市文化財協会.

松田隆嗣（1980）木製遺物の樹種について.「池上・四ツ池遺跡　第6分冊　自然遺物編」, p.131-144, 財団法人大阪文化財センター.

奈良国立文化財研究所（1993）木器集成図録　近畿原始編. 410.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1996）出土木製品の樹種.「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書　－第1分冊－」, p.113-138, 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会.

島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.

島地　謙・林　昭三・植田弥生（1987）鬼虎川遺跡出土木製品の樹種（第7次）.「鬼虎川遺跡の木質遺物　－第7次発掘調査報告書　第4冊－」, p.39-67, 財団法人東大阪市文化財協会.

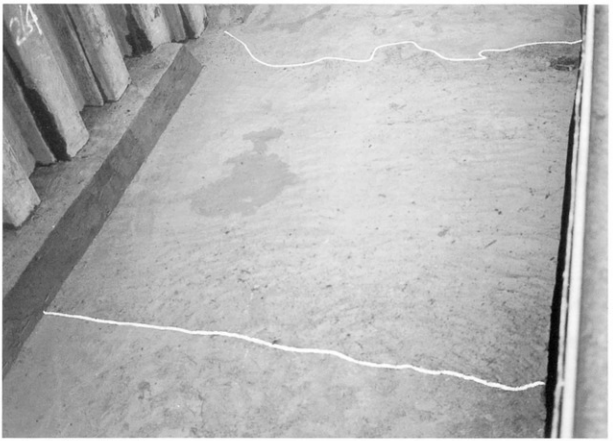
図　　版

図版1　A地区の遺構

1．溝2検出状況（北から）

2．第9層下位面足跡検出状況

図版2　C地区の遺構



1．溝3検出状況（北から）

2．溝3完掘状況（西から）

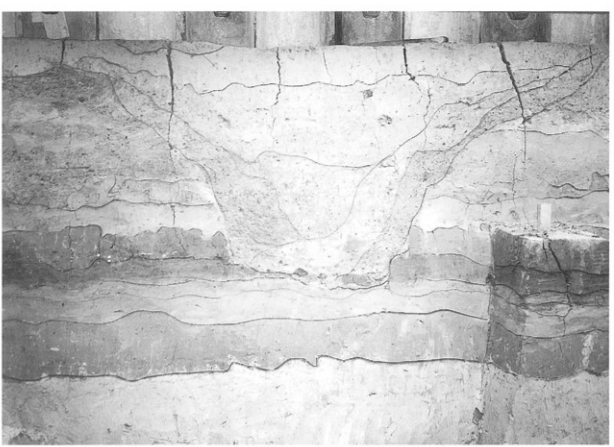
図版3　C地区の遺構

1．溝3遺物出土状況（西から）

2．土坑1、人頭大礫出土状況（北から）

図版4　C地区の遺構

1．溝4完掘状況（西から）



2．溝4東壁断面

図版5　C地区の遺構

1．第8層内横瓶出土状況

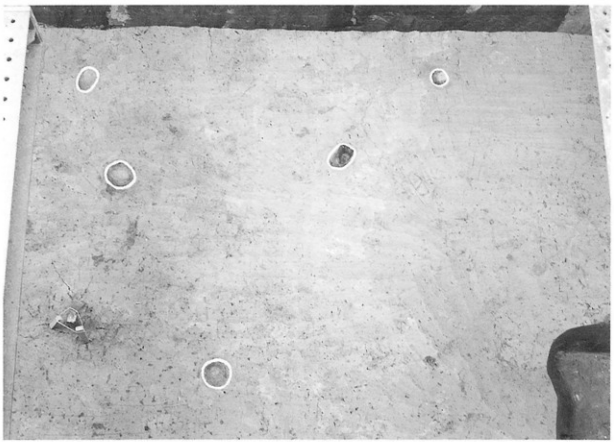
2．第9A層内枘穴加工木製品出土状況（西から）

図版6　C地区の遺構

1．自然流路1検出状況（南から）

2．自然流路1完掘状況（北から）

図版7　C地区の遺構

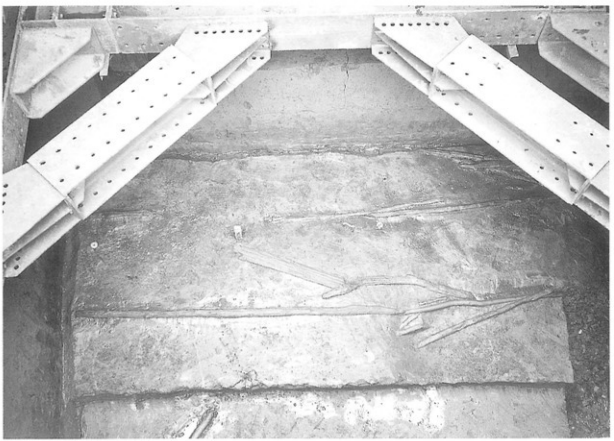


1.自然流路1右岸に伴うピット群（東から）

2.溝7・8、ピット完掘状況（北から）

図版8　C地区の遺構

1．自然流路1左岸と流向に沿った木製品（北西から）



2．第9A層内木製品出土状況（北から）

図版9　C地区の遺構

1．第11C層内弥生土器出土状況

2．第11C層内石庖丁出土状況

図版10　第11層出土遺物

1

7

3

18

6

20

24

弥生土器壷・小型把手付鉢・甕

図版11　第6・8・11層出土遺物

25

44

26

46

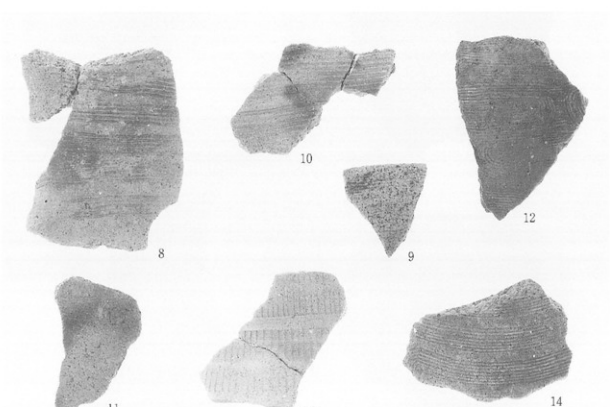
50

55

弥生土器甕、須恵器杯身・横瓶、土師器高杯

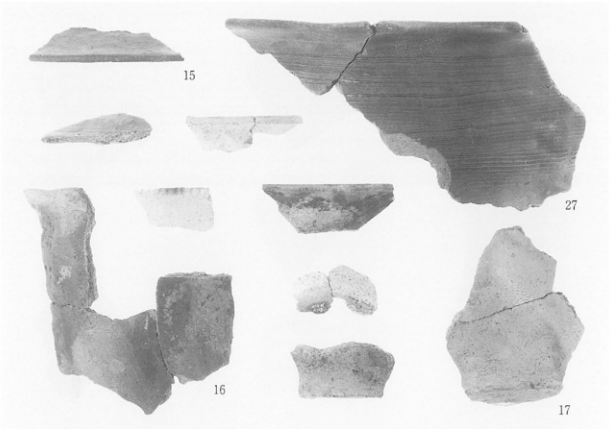
図版12　第11層出土遺物

1．弥生土器壷

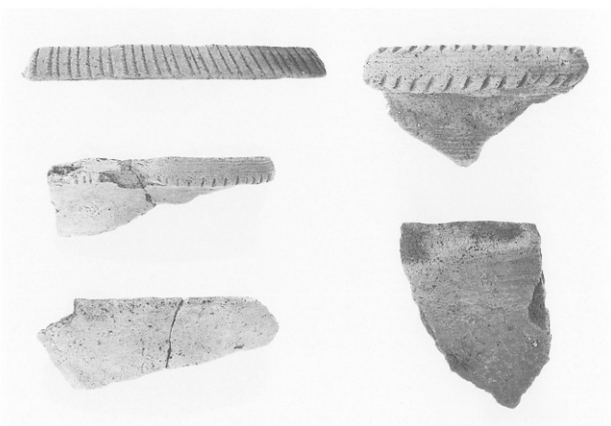


2．弥生土器壷・鉢

図版13　第11層出土遺物

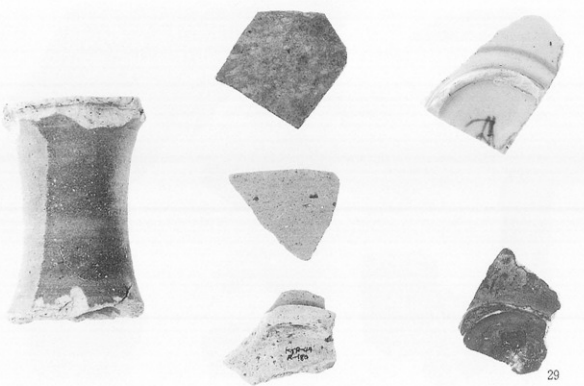


1．弥生土器甕壷・甕

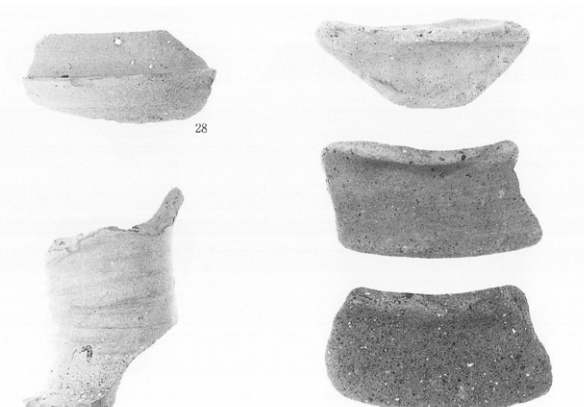


2．弥生土器壷・鉢

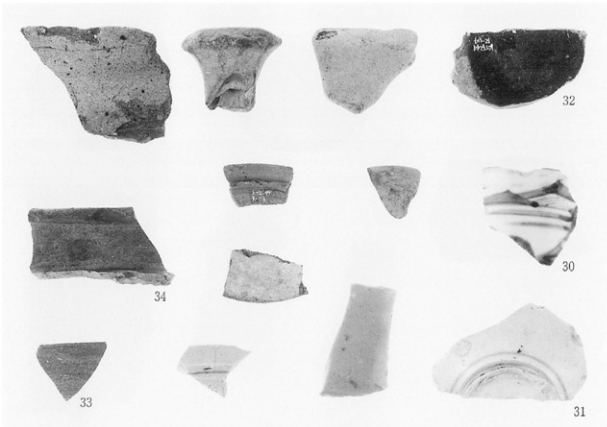
図版14　第1・2・4層出土遺物



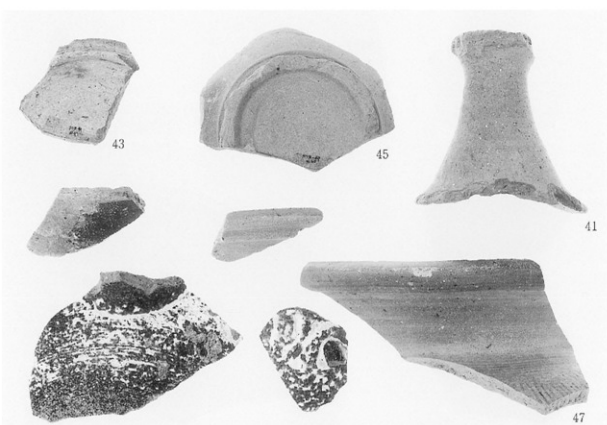
1.須恵器杯身・高杯、瓦器、磁器



2.須恵器杯身・壷、土師器鍋・羽釜

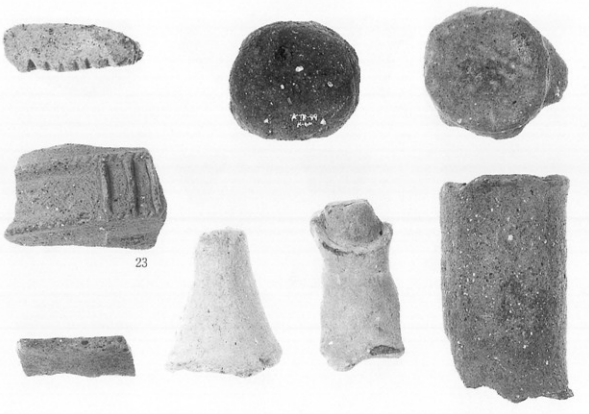


1.土師器小皿・高杯、羽釜・甕、須恵器杯身・高杯・甕・提瓶、黒色土器、磁器

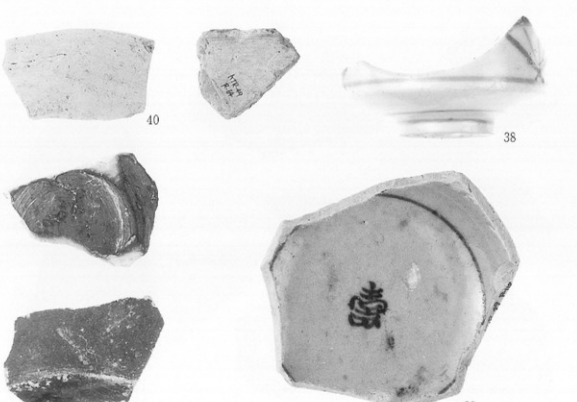


2.須恵器杯・高杯・甕・提瓶

図版16　第6層出土遺物



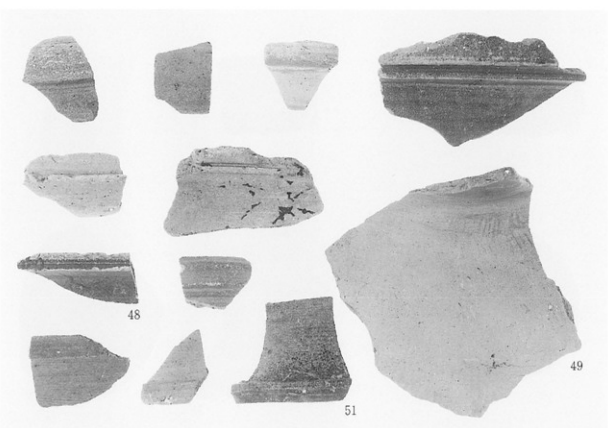
1．弥生土器壺・甕・高杯



2．土師器大皿、瓦器椀、陶磁器

図版17　第7・8層出土遺物

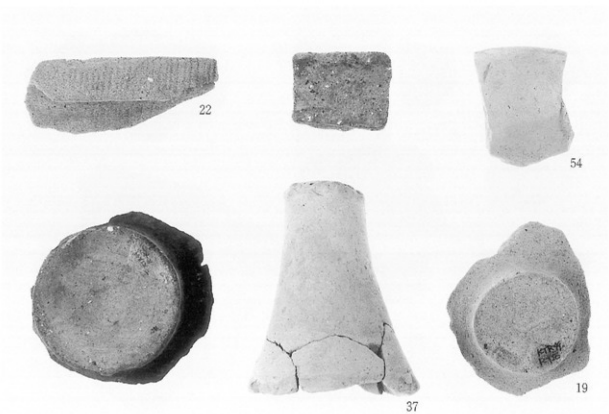
1.須恵器杯身・甕、土師器皿・甕・鉢



2.須恵器杯蓋・杯身・高杯・甕

図版18　第8・10・13層、溝1・3出土遺物

1.弥生土器壺・甕・鉢



2.弥生土器壺・甕蓋、土師器大皿・高杯

図版19　石製品

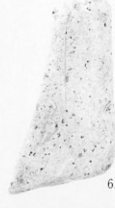
56

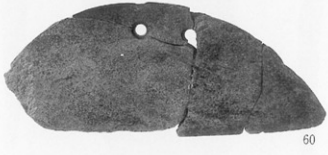
57

58

1．打製石鏃・石錐・削器

59


61


60

62

2．磨製石庖丁・砥石

図版20　木製品

曲物・板材・加工木・杭

図版21　木製品

72

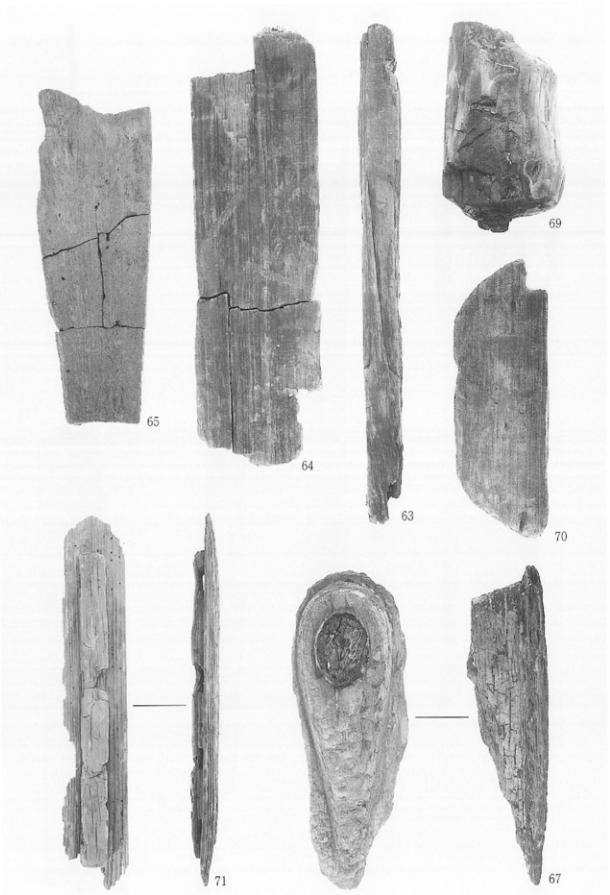
73

74

80

75

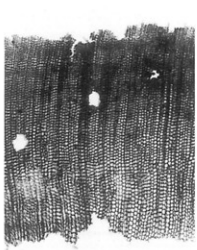
図版22 木製品



加工木・板材・鍬・木錘・曲物・樋

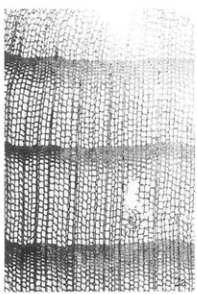
2
6
3
9
1
10
4
7
8
5

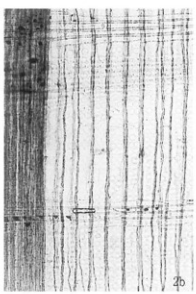
図版24　顕微鏡写真

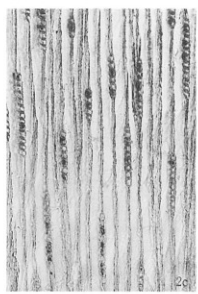

1a

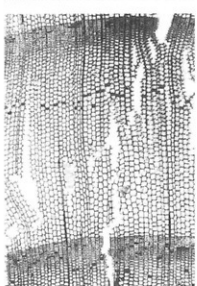
1b

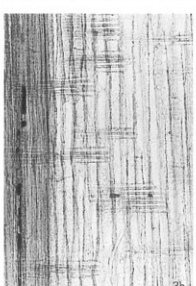
1c


2a


2b


2c


3a

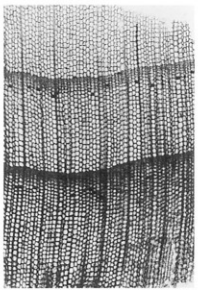

3b

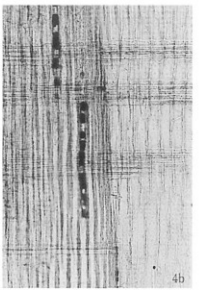
3c

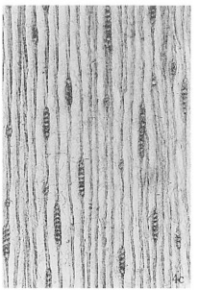
1.マツ属複維管束亜属（71）
2.モミ属（81）
3.スギ（75）
a：木口、b：柾目、c：板目

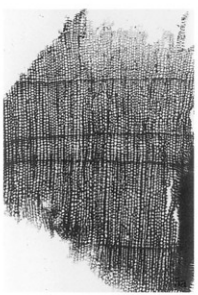
200 μm：a
200 μm：b, c

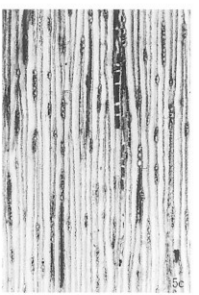
図版25　顕微鏡写真

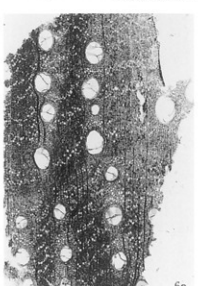


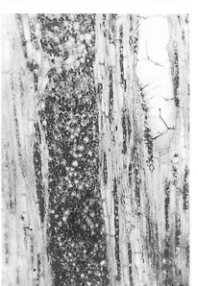








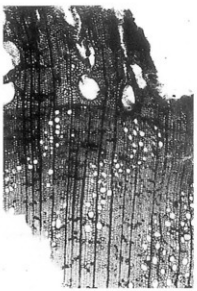


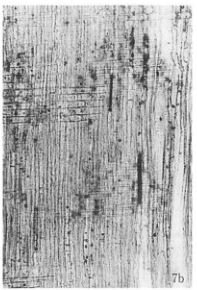


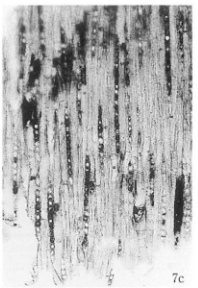
4．ヒノキ（64）
5．イヌガヤ（69）
6．コナラ属アカガシ亜属（76）
　a：木口、b：柾目、c：板目

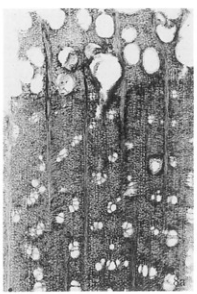
200μm：a
200μm：b, c

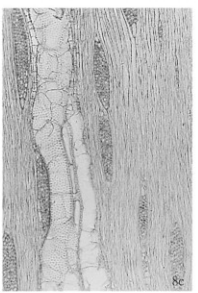
図版26　顕微鏡写真

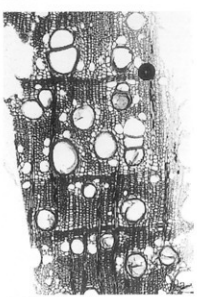


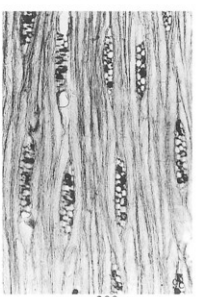








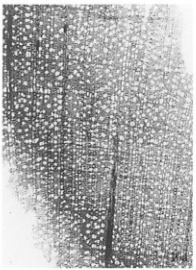


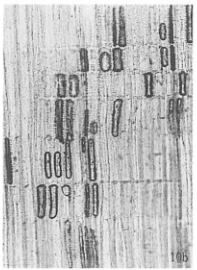


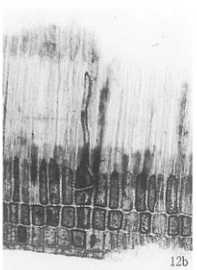
200 μm：a
200 μm：b, c

7．スダジイ（72）
8．ヤマグワ（78）
9．クスノキ（65）
　a：木口、b：柾目、c：板目

図版27　顕微鏡写真







200 μm：a
200 μm：b, c

10. シキミ（80）
11. サカキ（67 柄）
12. ハイノキ属ハイノキ節（73）
a：木口、b：柾目、c：板目

報告書抄録

ふりがな	きとらがわいせきだい49じはっくつちょうさほうこく
書名	鬼虎川遺跡第49次発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	首原章太・坂田典彦・槇原美智子
編集機関	東大阪市教育委員会
所在地	〒577－0843　大阪府東大阪市荒川３丁目４番23号
発行機関	東大阪市教育委員会
発行年月日	平成13年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
きとらがわいせき 鬼虎川遺跡	おおさかふ 大阪府 ひがしおおさかし 東大阪市 にしいしきりちょう 西石切町7丁目 191-1番地	27227		平成11年 7月30日 ～ 平成12年 3月30日	396㎡	道路建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	弥生時代中期	溝 ピット 土坑 自然流路	弥生土器 土師器 須恵器 瓦器 近世陶器 石器 木器 動物遺体	

一般国道170号西石切立体交差事業に伴う

鬼虎川遺跡第49次発掘調査報告

平成13年３月31日

発行　東大阪市教育委員会
印刷　(株)近畿印刷センター